

---

# ナイトキングの国

倉朝央里

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ナイトキングの国

### 【Nコード】

N8121W

### 【作者名】

倉朝央里

### 【あらすじ】

国民の反発心を消してほしい。

長寿の薬を探し求める二人にとある国王はそう依頼する。彼等が記憶を消すことが出来るという噂は大きく広まっており、また事実だった。しかし彼らはこれを拒否し、それにより軟禁生活が始まってしまうが

## side 宿屋の娘

宿屋の娘に好きな人が出来た。

一目惚れだった。宿屋に二人客が入り、家業の手伝いをしていた娘は運命と呼んでも過言でもない衝撃を感じたのだ。歩く度にわずかに揺れる銀にも見える白髪は日の光を浴びて更にその色を薄くしていた。男にしては大きめな瞳は未だかつて見たことがない金色にも見える薄い黄色をしていた。何よりもそして特徴的だったのはその声だった。見る相手に清潔感を与える白地のシャツを着ているせいか爽やかな印象を受ける。

「クジユ、明日は街を散策したいと思うんですけどどうですか？あ、保存食とかもいくつか買わないといけないですね」

一緒に宿屋へやってきたクジユへそう話しかけるウォルの声はまさしく澄んでいた。黒ずんだ液体の中に水のようなその声をひとつ垂らせばそれだけでその黒全てを浄化出来るのではないかと思えるほどウォルの声は澄みきっていた。きつとウォルの清らかさが声にあらわれているのだろう。

話しかけられているクジユは話は聞いているようだが口を開くことはなく。首を振るだけで返事をする。一切手が加えられていない無造作にカットされた黒髪が首を振る度に揺れる。誰かを睨みつけるように常に細められている漆黒の瞳はウォルに向いている。ウォルと対照的にすることが目的なのか、単にクジユ個人の好みなのかウォルと同じ型の黒地のシャツを着ていた。そしてそのシャツの袖からのびる両手の爪は黒く塗られていた。ウォルが爽やかな印象を受けるのに対してクジユはどこまでも陰湿な印象ばかりを受ける。

しかし客にそんなことを言えるはずもなく娘はとびきりの笑顔を作って二人を部屋へ案内する。ウォルが澄んだ声でありがとうと言

って微笑んだ。

「お二人はどこに行かれるんですか？」

「ううん……特に目的地はないんです。探し物をしてるんです」

「探し物、ですか？」

「ええ、そうなんです。寿命をのばすことが出来るような薬を探しているんですけど、心当たりはありませんか？」

「いえ、すみません」

「いやいや、いいんです。この街ではもう聞き込みしていたんで駄目元で聞いてみただけです」

ウォルが白い歯を見せながら爽やかに笑う。なんて素敵な人だろうかと娘は内心でウォルに対する高感度をこれ以上なくらい上げながらクジユを一瞥する。ウォルの斜め後ろを歩くクジユは目の前の娘とウォルの話など興味がないとばかりに通路の壁に貼り付けられているポスターなどを眺めていた。見つめすぎて目が合ってしまったのも嫌なので視線を前方に戻す。

「こちらがお二人のお部屋になります。二人一部屋でよろしかったでしょうか？」

「ええ、お金もありませんから」

この部屋にはベッドが二つ備えつけられている。けれど二人一部屋というのは結構狭いと思うのだ。ウォルがそれでいいと言うのなら仕方ないが。

「もう少し経ったら夕食をお持ちしますね」

「ありがとうございます」

部屋の扉を開けて脇に立つ。二人が部屋に入ったのを確認してから一礼してこの場を去る。扉を閉める瞬間にクジユと目が合った。細い目を更に細めて娘を睨むクジユはすぐに興味をなくしたのか目

を逸らす。娘は扉を閉め切ってから夕食の準備をしている両親の手伝いをするため台所へ向かうことにした。

「……あの人は怖い」

刺すような視線とか、全部を塗り潰してなかったことのようにしてしまうのではないかと錯覚してしまう漆黒とか。クジユはウォルの傍にいてウォルの清廉さを打ち消してしまっているような気がする。それではウォルが可哀相だ。

話を聞いたところによると二人は明日には宿屋を出て行ってしまいうらしい。街もその時にもう出てしまいうようですつまり明日になればもうウォルに会えなくなってしまうということだ。

「ねえ、お母さん。私夕食持って行っていい？」

「いいけど、そんなこと言い出すなんて珍しいわね」

「うん、まあね。たまにはちゃんと手伝おうかと思って」

台所で少しばかり夕食を作るのを手伝ってから自室へ戻る。誰も入ってこないように鍵を閉めて机の引き出しからレターセットを取り出した。それから小さめの引き出しを探ってペンを一つ引っ張り出した。あまり使わないので何度か振っていらぬ紙に試し書きを試してみてもペんがきちんと使えるか確認する。それから娘はどう書き出そうかと頭を悩ませた。

娘はこれでウォルに自分の気持ちを伝えるつもりだった。出会って一日も経っていないのだからウォルの何を知っているわけでもない。だが今気持ちを伝えなければもう会うことすら出来ないかもしれないのだ。そんなことに耐えられるはずがなかった。あわよくばウォルにいい返事をしてもらって、ウォルがこの街に残るなんて言うてくれればもの望みはないのだが流石にそれが実現出来るなどは本気で思うわけもない。ただ玉碎覚悟で気持ちだけでも伝えてお

きたい。それが本心だった。

「私は、貴方が、好き……です。もしよければ付き合ってください……い、っと」

声で内容を辿りながら手紙をまとめ上げていく。二枚ほどでまとめることが出来た内容を何度か見返して折りたたむと封筒へ入れる。丁寧に封をしてからそれをポケットに皺が出来てしまわないように注意しながらポケットへしまふ。なるべく音をたてないように椅子からおりて鍵を開ける。別に忍ぶ必要はないのだが恋文を書いていと親に知られるとなんとなく気まずいような気がした。

そろそろとドアを開けて台所へ急ぐ。時間的にはもうそろそろ夕食の準備が出来ている頃だろう。台所から漂ってくる良い匂いで夕食が出来ていることを確信する。その夕食を親がお客さんへ運んでしまふよりも早く台所へ辿り着かなくてはいけない。廊下は走らないように、と母にいつも注意されていたが今回はそれを破ってほとんど走るようにして台所へ向かう。台所へ辿り着けば両親はちょうど夕食を運び出そうとしているところだった。

「あ、待って！ さっき来たお客さんの夕食私が運ぶ！」

何事かと首を傾げる親から二人分の夕食を奪うように受け取ってからそれらを落としてしまわないように注意して歩き出す。

「私もたまには手伝いたいの」

不審がる両親にそう告げてから夕食が冷めてしまわないうちに、と少しだけ足を速めた。浮つく心をなんとか落ち着かせてウォルのある部屋の前に立つ。大きく深呼吸をして自分に落ち着くように言い聞かせる。いつまでも部屋の前に立っていたのでは不審者になってしまうから大きく息を吸い込んだ後覚悟を決めてドアをノックする。手に持っていた夕食がぐらついて焦ったがなんとかバランスを

取り戻すことが出来た。そちらに気を取られたせいで緊張が随分と消え失せてしまい、ドアが開いた途端身体が緊張で強張った。

「あ、さっき案内してくれた……」

「夕食をお持ちしました」

緊張をウォルに悟られないように平静を装う。わずかに震える手に気付かないふりをして二人分の夕食を乗せた盆をウォルへ手渡した。

「ありがとうございます。おいしそうですね」

「両親が作ってるんです。私は少し手伝いをしただけなんですけど」「手伝いでもすごいですよ」

世辞なのか本心なのかは定かではないが屈託ない笑みを浮かべながらそう言うウォルはもう一度娘に礼を言った。それから部屋の中に引っ込もうとするので娘はそれを引きとめる。

「あの、受け取ってもらいたいものがあるんです」

「……俺にですか？」

「はい」

声が上がってしまったように気を付けながらそう答えてポケットに突っ込んでいた手紙を引っ張り出した。少しだけ皺になっていたので両端を持って軽く引っ張ることで皺をのばしてからウォルへ渡す。ウォルは差し出された手紙を受け取れないでいる。夕食を持っているせいで両手が塞がってしまったからだ。

「あ、すみません」

「いや、大丈夫です。あー、えっと、お盆の上に置いてもらっていい

いですか」

「はい、すみません」

汚れてしまわないようにお皿とお皿の間に手紙を置く。少し体重をかけてしまったせいでウォルがぐらついたのですぐに身を引いた。

「お返事しますね」

そうウォルが返答するだけでこれ以上ないくらい心臓が跳ねる。

期待に胸が躍るがいつまでもここには迷惑だろうと思いついて頭を下げる。

「ではごゆっくり」

「ありがとうございます」

ウォルはきつと笑っているのだろうけどそれを確認する余裕がないほど娘は浮かれていて、目を合わせることもなく来た道を戻って行く。出来るだけ足音を立ててしまわないように、夕食を運び終えたことを報告するために両親の元へと急いだ。浮つく足を必死に地から浮かせてしまわないようにと注意しながら娘は歩いた。

今日は気持ちよく目覚めることが出来た。鳴り響く目覚まし時計を撫でるようにして止めてから髪を何度か撫でて寝癖を直す。何度撫でて寝癖は一向に落ち着く様子がない。仕方ないので寝癖は諦めてベッドから這い出して服を着替え始める。

「しー……」

目を刺す太陽から少しでも逃げようと瞬きを繰り返すが瞼の裏が赤くなるばかりで事態は何も変わらない。寝巻を脱ぎ捨てて服に腕を通す。寝起き独特の倦怠感を纏わりつかせながらしばらくの時間をかけてなんとか着替えを済ませる。今日は家業の手伝いをする気はなかったのであまり早く起きてはいなかった。のろのろとした歩みで自室を出ればお客さんがちょうど宿屋から出て行くところだった。

白と黒がはつきりわかれた二人は娘が昨晚夕食を運んでいったウォルとクジュだった。両親がそれを見送っている。それを見ては娘も出ないわけにはいかないだろう。慌てて玄関まで出ればウォルとクジュの姿はだいぶ小さくなっていた。その姿を見つめてすぐに頭を下げる。頭を上げた時にはちょうどウォルがこちらを振り向いて手を振っていた。

あの澄んだ声はこの距離では聞くことは出来ない。それが惜しかったが仕方のないことだと思った。ほぼウォルにだけに視線を送りながら娘は小さくひとつ息を吐いた。

好きだったはずの人が行ってしまった。

## 藪から棒に

「摩訶不思議な術を使うと言われていたクジユ様、ウォル様とお見受け致します」

突如目の前に現れた男は面で顔を隠していた。困惑を滲ませながらクジユとウォルが男を見れば男は面ごしにこちらを睨みつけた。

「だったらどうした」

クジユが重々しく口を開けば男が身体を震わせたのがわかった。それもそうだろう。クジユの声は一句だけでもそれを聞いた人の耳に纏わりつく。真夏の茹だる暑さにも劣らない不愉快さを感じさせる纏わりつき方をもつてしてクジユの声は更に人の内側へ滑り込む。粘着質なその声は聞いた者の中に潜む後ろ暗い部分をじわじわと拡張させていく。内側を暴かれているような不快感にウォルの眉間にも皺が寄る。何度聞いてもこの声には不快感を覚えてしまう。

警戒心をあらわにし、愛想をかけらも見せようとはしないクジユに気分を害した風もなく男は面のせいで表情の窺えない顔をこちらに向けて口を開いた。もつとも、面をしているせいで開いた口は見えないが。

「それならば、我等に御同行願いたい」

「我等、ですか？」

ウォルが首を傾げる。どこをどう見ても男は一人しかいない。それなのに男は我等と口にした。その矛盾に理解が出来ないでいるとクジユがウォルの肩を叩いた。

「ん？」

振り返ればクジユは無言で更に後ろを指差している。背後には十人ほどが全く同じ面をつけ、それぞれに武器をも持って並んでいた。

「これは……大変ですね……」

「もう一度だけ。御同行願います」

前方の一人が先程と全く同じ声音でそう繰り返す。クジユとウォルは顔を見合わせると両手を耳のあたりまで挙げた。

「俺達は人並み以上の戦力があるわけじゃないですからこの数を相手にするのは無理ですね」

「一対二でも怪しいがな」

「ああ、それは言えてますね」

そう言う通りクジユとウォルの手持ちには武器のようなものは一切ない。武器を突き付けられてわずかに身体が震えているがクジユもウォルもそれには気付かないふりをして前方の男を見据えた。

「大丈夫です。抵抗しない限り危害は加えません」

そう男が言うと同時に二人の首筋に槍が、銃が、刀が付きつけられる。そのひやりとした感覚に内心恐怖しながらもそれを表に出すことなく虚勢を張って二人は示し合わせたように溜息を吐いた。

「申し訳ありません。これも王の御意志ですので」

本当に申し訳なさそうに前方の男は一度頭を下げると懐から縄を取り出して二人へと近付いた。

## 不躑に最強

面をつけた男に連れてこられたのは質素とは言い難い豪華な一室だった。延々とした庭を抜き去って絢爛豪華な官邸に通された二人はそれぞれが別の部屋へと通された。部屋といても牢獄のような場所ではない。部屋の棚にはところ狭しと高そうな壺や置物が陳列されている。部屋の中央に置かれているベッドはこれまた高級そうな生地で作られていて触ると滑るように流れた。ここに来るまでは縄で拘束されていたのだが今は外されていて、手足を拘束されていないわけではない。無理矢理連れて来られたにしては扱いが良いような気がする。ウォールと引き離されたのがどうにも気に入らないがこうして自由なだけマシだと思えばいいだろう。

これからどうするべきか。逃げるといふ選択肢もなくはないがクジユもウォールも武術に長けるわけではないのだ。ましてやここを誰にも気付かれず、もしくはうまく立ち回って脱出出来るほどの策士なわけでもない。それがわかっているのでその上で行動を起こすのは危険だろう。今は抵抗しない限りは手出しをしないという面の男の言葉を信じるしかないように思えた。

「鍛えてれば良かったか……」

元々ウォールはわからないがクジユは戦闘には向いていないのだ。思いもしないことをそうばやいてみて退屈を紛らわす。ベッドに腰掛けて足を投げ出したところでドアがノックされた。こちらの返答があるよりも早くドアは押し開けられる。

「突然連れて来ちまって悪いな」

生まれつきなのかくすみのない光を跳ね返すような金色の短髪。

それは毎日丁寧な手入れがされているのか男が身体を揺らす度身体  
の線に沿って滑らかに流れた。笑顔こそ浮かべているがその眼光は  
鋭く敵意すら感じる。男が身につけている衣服にはきめ細やかな刺  
繍や金での装飾が施されており、一般人でないことは一目瞭然だっ  
た。

「……」

男にどう答えたものかとクジユは苦悩した。返答しようにもクジ  
ユの声は少しばかり特殊なのだ。クジユの声を聞けばほとんどの人  
間は眉間に皺を寄せる。つまり不快にさせてしまう。そういった性  
質なのだ、仕方がない。だからこれまではやり取りのほとんどはウ  
オルに任せていたのだがウオルがいないのであればクジユが返答す  
るしかないだろう。しかしそう気軽に声を聞かせてしまってもいいも  
のだろうか。そうやってぐるぐると考えていると男はクジユの返答  
がないことにも構わず続けた。

「俺はチェック。この国の王をやらせてもらってる」

王と言うわりにはチェックの仕草や言動からは王らしい気品は感  
じられない。その言動は粗削りで動作のひとつを取っても繊細さは  
見られなかった。そのあたりはチェックの人柄なのかもしれないが  
総合的にクジユの目から見てチェックのことを王だとは思えないで  
いた。

「お、その顔だと信じてねえな？ その辺は自由だけだな、俺の頼  
みは聞いてもらいてえ」

なんと不躰な物言いだろうか。拉致紛いなことをされている身な  
ので口応えをする気はないが眉間に皺が寄るのは致し方ないことだ

ろう。チェックはクジユの反応などどうでもいいのか更に続けた。

「俺はな、王の座に着いてから日が浅いんだ。そのせいもあって反発が絶えなくてな。お前さんの使うおかしな術な人の記憶を消せるんだろっ?」

「……反発してる人間のその記憶を消せとでも?」

クジユが言葉を発した途端にチェックの身体が強張る。その瞳は見開かれ恐怖が宿ったがその反応には慣れきっていたので意にも止めない。チェックは流石は王と言うべきか恐怖をすぐさま押さえ付けてから何事もなかったかのように続けた。その額には汗が伝う。

「そうなるな」

「無理だな。やるやらない以前に規模がでかすぎる。他をあたれ」

この場で嘘をついてもいずれ出来ないことはバレてしまう。小規模ならば多少の記憶を改変することは出来るが反発する者は一人や二人ではないのだろう。そうでなければおかしな術と持つという噂のみで王が動くはずもない。藁にも縋りたい状況に置かれているかもしれない。

クジユの返答をどう受け止めたのかチェックは芝居がかった動作で首を振るとドアに手をかけた。

「その返答は交渉決裂ってことか。でもな、俺には手段を選んでる暇はねえんだ。そっちがそうくるなら軟禁生活によっこそ、ってことになるわな。良い返事をくれるまでここから出すわけにはいかねえ」

半分ほど開いたドアの間をすり抜けたチェックはドアを閉めながらその隙間に手を差し込んで小さく何度か振った。

## 束の間に再会

ウォルはクジユと引き離されてひたすらに憂鬱になっていた。クジユと同じように豪華な部屋に通されたがそれを眺める余裕もないほどウォルは落ち着きを欠いていた。忙しく部屋を歩き回りぶつぶつと小言を繰り返す。

「クジユ大丈夫かな。口下手だから誰かを怒らせたりしてないといんだけど……とにかく早く合流しないと」

冷静さを取り戻せないままクジユと合流することばかりを考える。拉致されている手前、あまり目立った行動をするのは得策ではないがクジユを一人にしているは何が起ころかわからない。ただのいざこざで終わればいいのだがクジユの場合そうもいかないかもしれない。その懸念がウォルに焦りばかりを募らせた。

「ああああ、もう！ どうしよう！」

動くべきか動かざるべきかしばし考え込んだ末に出口に足を向けた。その瞬間にドアがノックされてその足が竦む。

「あ、はい。どうぞ」

逃げ出そうとしていたことを悟られないように後退してベッドに腰を下ろしてから声を上げる。それを待っていたドアの向こうの相手は極力音をたてないよう注意を払いながらドアをゆっくりと開いた。

「失礼します」

深い一礼をしてから入室してきたのは面をつけた男ではなく、給仕をする者を思わせる衣服を身に付けた女性だった。この官邸の主ではないらしくその手は炊事で酷使しているのか荒れて赤くなっており、顔に化粧は一切施されてはいなかった。ここで働く者だろうか。女性はドアを丁寧に閉めるともう一度礼をした。

「私はこの官邸で給仕などをさせていただいております、シーナと申します。この度は王がこのような手荒な真似をしまい申し訳ありません」

「いや、あまりお気になさらないでください。ほら、長い距離移動する賃金が節約出来ましたし」

「……どこか目指されているのですか？」

「まあ、明確な目的地があるわけではないのですが」

シーナがあまりにも申し訳なさそうに謝罪するのでウォルは思わずそう言い訳する。嘘を言っているわけではない。目的地はないがクジュやウォルは出来るだけ多くの場所を旅して回る必要があった。そのために拉致という形であつてもこうして誰かと交流をとることが出来るのは悪いことではない。それにそうポジティブに考えなければこんな状況で平然としていることは出来なかった。

シーナの外見はある意味クジュと酷似していた。鴉の羽の色を織り込んだような黒髪は仕事を上で邪魔なのか低いところをひとつに束ねられて尻尾のように彼女が動く度に揺れている。瞳も同じように深い黒をしており、見つめ続ければ吸い込まれてしまうようだった。

「俺と同じようにもう一人ここに連れてこられたはずなんですけどどこにいるんですか？」

「クジュ様のことですか？ でしたら王が協力を願っている頃かと」

「協力？」

クジユとウォルにはそれぞれ少しばかり特殊な能力が備わっている。自慢して回るほどのものではないが、二人はその能力を活かして生活を成り立たせていた。そのため噂が流れているのも決して悪いことではないし、出来るだけ依頼は受けたいと思っっている。多くの場合、求められるのはクジユの能力で、依頼を受けるか否かを判断するのは専らクジユの役目だ。今回も依頼だと言うのならウォルが口を挟む余地はないのだろう。それに依頼だと言うのなら易々と殺害されてしまうということもない。そこまで聞いてウォルはひとまず安堵した。

「クジユ様は記憶を消すことが出来るのだと噂でお聞きしました」  
「まあ、そんなところですね」

厳密には消すのではないのだがそれを今シーナに言ったところでどうなるわけでもないので黙っておくことにする。

「王はクジユ様に消していただきたい記憶があるのです。この国で拡大しつつある王への反発心を」

「はあ、それは……」

恐らくはクジユでは無理だろう。それはわかったがそれを最終的に判断するのは実行主であるクジユだけだ。ウォルが口を挟めるはずもない。ウォルが表情を曇らせたのが困ったように見えたのかシーナは申し訳なさそうにもう一度頭を下げた。

「ウォル様、心苦しいのですが私個人からも依頼があります。消していただきたい記憶があるのです」

「それは貴女の？」

「ええ、消していただきたい私の記憶は、」

彼女が集く言葉を紡ごうとした瞬間、乱暴にドアが開かれる。力の限り開かれたドアは蝶番が悲鳴を上げる。壁に叩きつけられても勢いは衰えず、跳ね返るドアを受け止めたのはチェックだった。その背後にはクジユも顔に憂鬱を貼りつけて佇んでいた。

「お。取り込み中だったか」  
「クジユ！」

チェックの言葉が終わるとほぼ同時にウォルが声を上げる。立ち上がってチェックを押しつけるようにしてクジユの目の前まで来た。チェックはウォルの邪魔になってしまわないように道を開け、シーナはそのチェックに一礼をして少し後ろへ下がる。

「クジユ、心配してたんですよ。クジユが変なことやって誰か怒らせてやしないかって」  
「……」

心外とばかりにクジユが表情を歪めたがウォルはそれを黙殺する。チェックは二人の様子を眺めて溜息を吐いた。

「コイツがなあ、ウォルに会わせる会わせろってうるさいからよ、仕方なく」

「王、クジユ様への依頼は」  
「断られた。無理だとさ。まあ俺に諦める気はねえがな」  
「そうですか」

それだけ告げるとチェックは踵を返してもと来た道に戻り始める。彼が歩く度に衣服に取りつけられている金の装飾がかちゃかちゃと

擦れる音をたてる。廊下まで出たシーナは深々と礼をしてそれを見送った。

「面倒な人に捕まりましたね」

「そうだな」

憂鬱が凝縮されたクジユの嘆息混じりの声に頭を下げたままのシーナが身体を震わせたのがわかった。

## 気軽に王様失格

ウォルはクジユと離れることを拒んだ。それを受け入れたチエツクはクジユにあてた部屋にもうひとつベッドを運びこませ、二人で一部屋を使用することを許可した。脱走を試みれば命はないと念を押して、の話だが。それでも二人にとっては有り難いことだったのでその日は脱走など考えることなく寝心地のいいベッドで睡眠をとった。これまであまりきちんとした場所で睡眠をとってこなかったせいかクジユ、ウォル共にその日は深い眠りに落ちてしまっていたようで、目覚めたのは昼が近くなった頃だった。

「……クジユ、おはようございます」

「おう」

黒ずんだ液体の中に水のようなその声をひとつ垂らせばそれだけでその黒全てを浄化出来るのではないかと思えるほど澄んだウォルの声。それをすぐさま聞いた者の中に潜む後る暗い部分をじわじわと拡張させていく錯覚に陥らせるクジユの声が相殺する。クジユの声をウォルが浄化し、ウォルの声をクジユが侵食することで二人の特殊な声はなんとか平均的のところまで持つて行くことが出来ていた。

「なんかこんな時間に起きるなんて重役出勤みたいですね」

「ある意味重役だな」

「言われてみれば、そうですね」

目を擦りながら苦笑するウォルに冷たく返してからクジユは布団を押しつけてベッドから出る。眠気が抜けきらないせいで足取りはおぼつかないがドアまで辿り着くと体重をかけるようにして押し開

けた。

「クジユ、どこ行くんですか？」

「着替えがない」

「あ、本当ですね」

ウォルは言われて初めて気付いたのだがこの部屋には着替えらしき物が置かれていなかった。忘れていたのだろうか。ウォルは構わないのだがクジユは寝起きの姿のままでは耐えられないらしい。誰か人を捜して着替えを用意してもらうつもりなのだろう。それならば一緒に行こうとウォルが布団から出たところでクジユの動きが止まった。ドアを開けるべく体重をかけた体勢のままクジユは耳を澄ましているようだった。何かとクジユに倣い耳を澄ます聞こえてきたのは陶器が割れる音だった。それもひとつや二つではない。

「ちよつ、クジユ!？」

割れる音が鳴り止むと同時にクジユはドアを完全に押し開けて部屋を出た。あの音は相当に近くから聞こえていたので動かない方が得策だとは思うのだがそれを伝えるよりも早くクジユは出て行ってしまったので慌ててそれを追う。

何やら騒動が起きていたのは隣の部屋だった。誰かが怒鳴っているのがわかったが壁で隔たれているせいで内容までは聞き取れない。内容を聞き取ろうとクジユが忍び足で部屋へ近付く。あともう五歩ほどで騒動の発信源である部屋のドアに触れようかと言ったところでそのドアが乱暴に開け放された。

「王！ 俺は納得出来ませんから！」

チエックでもシーナでもない。初めて見る男は腰に刀を差しており、全てを吸い込んでしまいそうなほど深い黒をした瞳は部屋の奥を睨みつけていた。

男は二人に気付くと怒りに燃えた瞳を隠すかのように瞼を下ろした。次に瞼を上げ、目を開いた時には瞳からは憎悪は拭い去られており、男は一礼すると踵を返してどこかへ行ってしまった。

「なんだったんでしょね……」

「見苦しいところを見せちまったな」

ドアに手を沿えて廊下を覗くようにしていたウォルがそう呟けばクジユが返答するよりも早く溜息混じりの返答が部屋の中から飛んできた。チエックの声だ。部屋から出てきたチエックは起床して随分時間が経つのか髪は綺麗に纏められていて、昨日よりも豪華さを感じさせる衣装に身を包んでいた。

「あれは弟だ」

「王様の、ですか？」

「そんな堅苦しく呼ぶな。チエックでいい。……いや、俺じゃなくてほら、いただろ、女が」

「シーナさんの？」

「そう。シーナの弟。俺とシーナが付き合ってるのが気に入らないんだそうだ。一応身内だから適当にあしらうのも気が引けてな」

説得を試みているのだが議論は平行線で互いに歩み寄れる気がしないのだとチエックは自嘲を織り交ぜながら説明した。眠いのか説明し終わってからチャックは大きく欠伸をひとつ零し、両腕を振り上げて背伸びをする。

「んん……。で、お前らはなんでここにいるんだ？ 隣の部屋がう

るさくて目が覚めたか？」

「いえ、そんなことは」

「着替えがない」

端的に用件だけをクジユが伝える。不満を含ませていたわけではなく、ただ事実だけを口にしたいといった様子のクジユだったがチエツクは申し訳なさそうに眉を八の字に下げた。クジユの声に怯えたのか瞳が一瞬揺れたがすぐに何事もなかったかのように揺れはおさまる。

「ああ、悪い。配慮が足りなかった。今すぐシーナに用意させる」

ドアを開け放したまま部屋に戻って行ったチエツクは部屋に取り付けられている電話に手をかけた。二人が眠った部屋にはなかったのだがこの部屋には電話があるようだ。金色をした籠が電話本体に巻きついており、子機へは金色をした蛇が巻きついていて。本体と子機を繋ぐくると何度も円を描いているコードはやはり金の細かな装飾が施されていた。チエツクは子機を持ち上げると本体のボタンをいくつか押して、子機を耳に押し当てた。

「シーナか？ ああ、俺だ。クジユとウォルの着替えがないそうだから用意しておいてくれ」

電話の向こうのシーナが何か返答をしているのかチエツクが何度か頷く。それから「頼んだ」とだけ残してチエツクは子機を元の場所へと置いた。がちよん、というなんとも間抜けな音がしたがチエツクは慣れているのか何の反応も見せない。クジユの背後ではウォルが笑いを噛み殺していた。

「俺は今日出掛けるからここにはいねえんだ。世話はちゃんと任せ

であるから俺のいない間に依頼のこと考えておいてくれよ」

「無理だと言ったはずだが」

「……だから考えておいてくれって」

クジユの声に慣れないのかチエックは一瞬口を噤んで冷や汗を浮かべたがすぐに繕って引き攀った笑みを浮かべた。繕うのに時間が足りなくて引き攀れてしまったのだろう。

「どこに行くんですか？」

「これでも一応王様だからなあ……。家に籠ってばかりもいらねえんだよ」

ウォルの質問に曖昧に答えてからチエックは二人の間をすり抜けて廊下を歩き出した。足取りは重く、外出することが憂鬱なようだった。それを見送るクジユの瞳は多分に呆れが含まれている。

「あいつは本当に王なのか？」

「そうみたいですよ」

あの姿を見せられてウォルもだんだんと自信がなくなってきたのだがシーナの話を聞く限りそれは真実なようだ。ひどく曖昧な答え方になってしまったがそれを受けたクジユは眉間に皺を寄せた。

「呆れた。国が潰れるのも時間の問題じゃないのか」

「さあ、どうなんでしょう？」

だからこうしてクジユが連れてこられたのだろう、という言葉は言われずともわかっていると思うので飲み込むことにした。

## 老人庭師はかく語る

チエックが出掛ける間際に言ったように少しするとシーナが二人分の着替えを持ってやって来た。それに着替えてからシーナが用意したのだという豪華な朝食を有り難くいただいて、その後シーナの案内で庭へと連れて来られた。

「すみません。本当こちらが足を運ばなければいけないのですが、我儘な子で」

二人を退屈させないためなのか時折通りかかった部屋の説明をしながらようやく庭へ出たところでシーナはそう謝罪した。どうやら誰かに会わせるつもりらしい。クジユからすれば部屋に一日中閉じ込められているよりは気分転換が出来るのであり気にはしないしてほしいと思う。それを伝えるためにはどうしても彼女を怯えさせることになってしまうので伝えることは諦めているとウォルが口を開いた。

「気にしないでください。部屋にずっといるよりは気分転換出来るいいですから」

「……すみません、本来ならお客様として招かなければいけないのに軟禁のようなことをしてしまっ……」

「あ！ いや！ 俺はそういうつもりで言ったんじゃないんですね！」

ウォルのフォローは良くない方向へ解釈されてしまったらしい。

一気に沈み込んだシーナにどう声を

掛けようかと考えあぐねているウォルは助けを求めるようにクジユを見たがクジユにはどうすることも出来ないので無視する。

「あ、ひどい」

非難するように飛ばされた声も無視する。

こうして話しながらもシーナは庭を突き進んでいく。その後を追っていくとだんだんと木々が少なく、視界の開けたところへ出始めた。三人が芝を踏む音に混じって時折何か風を切る音が耳に届く。その正体が気にはあるが落ち込んでいるシーナに問うのも気が引けるので黙っておいた。歩けば歩くほどその音は大きくなり、更にそれに加えて気合いを込めた声まで聞こえてきた。それらから予想するに誰かが何かを振っているのだろう。

「あ」

不意にウォルが声を上げた。木々はもう既にほとんど見当たらなくなっており、視界はかなり広がっていた。その視界に飛び込んできたのは、ウォルだけではなくクジユも思わず反応を示してしまうものだった。ウォルと違って声は出なかったが代わりに目が軽く見開かれる。二人の反応を見たシーナは不思議そうに首を傾げた。

「あれ？もしかしてもう顔を合わせてたりしますか？」

「……ええ、ちょっと見かけただけですけど」

視界に入ってきたのはチェックが言い争いをしていた男だった。木刀を握った男は掛け声と共にそれを振り上げ、振り下ろす。それをどれくらい繰り返していたのか深い黒髪は汗を吸い込んで更に黒く染まり、首筋にべったりと貼りついていて。男は前方を射殺すように睨みつけながら一心不乱に木刀を振り続ける。余程集中しているのか三人が近付いていることにも気付いてはいないようだった。

「ナイトラ、お客さんに挨拶しなさい」

シーナが男の名前を呼んだ。そこでナイトラと呼ばれた男はようやく三人に気付いたらしく振り上げた木刀を振り下ろそうとしたところでぴたりと動きを止めた。急に動きを止めたせいで髪に纏わりついた汗が飛び散ったがナイトラは気にも止めていないようだった。木刀を緩慢な動作で下ろしてから、流石に額から流れてくる汗は邪魔なのか服の袖で乱暴に拭う。それから億劫そうに三人の方へと首を回した。

「……クジユ様とウォル様ですか。本来は俺がそちらに出向くべきでしたね、申し訳ありません」

最後の一言は棒読みで謝罪の気持ちが入められているように思えなかった。それに文句をつけてやるうかとクジユが口を開きかけたところでそれを先読みしたウォルがそれを制す。そして喋る役割を引き継いだ。

「いえ、大丈夫ですよ。ナイトラさんはシーナさんの弟さんなんですよよね？」

「はあ、まあ。それをどこで？」

「チエックさんから聞いたんです」

「ああ……」

チエックの名が出てきた途端ナイトラが苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。仮にも王だろうにそこまでチエックが嫌いなのだろうか。そのあからさまな態度を諭すようにシーナがナイトラの名を呼ぶ。それを受けてナイトラは今にも舌打ちでも零しそうな表情でわざとらしく話題を逸らした。かすかに乱れる息を整えながら首だけでなく身体も三人の方へ向けてナイトラは口を開く。

「俺はナイトラと言います。御存じの通りシーナの弟で王の護衛役として騎士をしています」

後半でチエックの名を出した途端これ以上なく嫌そうにナイトラの表情が歪む。乱れた息は既に整えられていて、纏わりつく汗が外気によって冷えてしまい冷たいのか首を振って汗を散らした。なんだか犬のような動作だと思う。

「毎日の日課の鍛錬で足を運ぶことが出来ませんでした、申し訳ありません」

相変わらずの気持ちの込められていない謝罪にウォルがもう一度同じような言葉を返そうとしたところでナイトラの眉間に皺が寄った。思えば先程からナイトラの不機嫌そうな表情しか見ていない気がする。今度は一体何だろうかとナイトラを眺めているとナイトラは二人に向かって一礼すると木刀をその場に投げ置いて舌打ち混じりに駆けて行った。

「……へ？」

「すみません。多分、王から電話があつたんだと思います」

「電話？ この距離で聞こえるのか？」

「そつみたいです」

クジュの声に一瞬怯んだ様子を見せたがジーナは何事もなかったかのようにそう返す。そのあたりは彼女にもよく理解出来ないのか苦笑混じりだ。

「ちょっとナイトラだけに任せると心配なので私も見てきますね、すみません」

「お気になさらず。俺達はこのあたりでぶらぶらしてるんで。ね、クジユ？」

「……」

クジユが無言で頷いたところでシーナはもう一度すみませんと申し訳なさそうに謝罪すると駆け足でナイトラが駆けて行った方向へ向かう。それをしばらく見送っていたがシーナの姿が見えなくなつたあたりでウォルが大きく息を吐いた。

「やっと息を抜けるって感じですね。……クジユ、逃げますか？」

「いや……」

ウォルの問いにクジユは顎に手を沿えて考える素振りを見せる。すぐに結論は出たのかクジユは顎から手を離すと首を横に振つた。乱雑に切られた黒髪が少し遅れてその動きに沿って流れる。

「無理だろうな。ナイトラは相当に腕が立つように思うし、この庭も相当に広い。迷わずに逃げ出せればいいが万が一迷った場合は絶望的だ。逃げるならもつと確実な時の方がいい」

「それはそうなんでしょうけど……」

クジユが言うことは尤もだ。正論だと思う。しかしクジユはチェックの依頼を拒み続けているのだからその機会を待っているうちに殺されてしまうという可能性も皆無ではない。今のところ相手にそういう様子は無いが依頼内容からしてもチェックは相当に追い詰められているようだからそう長くは待ってはくれないだろう。いつ強行手段に出てくるかはわからない。ウォルの危惧はわかっているのだろうがそれでもクジユは今回脱出する気はないようだった。

「まあ、クジユがそう言うなら俺も従いますけど。じゃあどうしま

す？ 庭でもぶらぶらしますか？」  
「そうだな」

逃げ出さない以上特にすることもないのでシーナに言った通り庭を意味なくうろつくことにする。庭は先が見えないほど広く、チエツクが王というのも本当なのだろうなと思えてくる。そんな少しずれた納得の仕方をしていると少し先の木々が生い茂っているあたりに人影が見えた。

「あ、人ですかね」

余程退屈だったのかウォルがそちらへ駆け寄っていくのをクジユが歩いて追いかける。人影は二人に気付いたのか木々の隙間を縫って姿を現した。

「……庭師さんですか？」

姿の現したのは老人だった。既に六十は超えているであろう老人は麦わら帽子を被り、手には剪定鋏が握られていた。そして両手には使い古されてかなりぼろぼろになっていく軍手をはめられている。老人は二人を見てしょぼしょぼした目を細めると戸惑いがちに口を開いた。

「逃げないのかね」

「俺達インドアなんですよ。体力ないんです」

ウォルがやつぱり普段から鍛えておくべきですかね、なんとぼやきながらそう苦笑混じりに返せば老人は視線を落とした。

「この国は平和だ。長らく争いもない」

「それは良いことですね」

「そうだな。しかし平和すぎるあまり国民は国の内側を攻撃するようになってしまった」

「と、言いますと？」

老人が言うにはこの国は平和すぎるそうだ。人間は本質的に攻撃的な一面を持っているもので、争いが無いせいでその攻撃性は溜まりに溜まってしまっているらしい。その鬱憤は就任して間もない王にすべて向けられてしまっているとのことだ。

「シーナには会っただろう。王と彼女は交際をしておるのだよ。身分違いの恋というやつじゃ」

平和ボケした国民は王の発言を一言一言入念にチエックし、少しでも失言があれば揚げ足をとって責め立てることで留飲を下げているのが現状だ。そう言った意味ではチエックとシーナの交際は絶好の批判の標的でしかない。王としての自覚が足りないだとか、身分の違いを知るべきだなどといった批判が毎日飛び交い、チエックやシーナ、弟であるナイトラへも度々飛び火して三人を疲弊させている。チエックはその現状をなんとか改善したくてクジユとウォルを呼びつけたのだそうだ。そう老人は説明する。

チエックの気持ちはわからないわけではない。国民がそんな調子なのならばシーナと別れたところでまた違う批判が飛んでくるのだろう。それならば国民のそういった感情を消してしまった方が早いと考えたのか。理屈はわかるがそう考えてもクジユにそれを実行することは不可能だった。協力してやりたいのは山々だが出来ないのだ。そんなことをクジユが考えていると説明を終えた老人が目線を上げて二人を見た。

「世間はそう言われますが、貴方達もそれが真実だと思われませんか」

？」

「はい？ それはどう……」

老人は意味が理解出来ないと言葉を傾げる二人に構うこともなく剪定鋏を持ち上げて仕事で戻って行った。ウォルが何度か声をかけて引きとめようとするが老人は止まらない。出てきた時と同じように木々の隙間を縫って消えてしまった。

「……庭師の言うことは本当なら」

「クジユ？ いきなりどうしたんですか？」

また顎に手を沿えて考えごとに入し始めたクジユに声をかけるがクジユの反応はない。クジユはしばらく無言でいると独り言なのかウォルに聞こえるか聞こえないかくらいの音量で呟く。

「俺に消して欲しいものは……違う？」

どういう意味だろうか、ウォルには全く意味が理解出来ない。クジユも完璧に意味を理解して呟いているわけではないようなのだがそれでもわかつている限りのことは教えてもらいたい。そんな気持ちでクジユに問おうと口を開きかけたところで背後から気配がした。

「余計な詮索はやめていただきたい」

急いで戻って来たのかナイトラの息は乱れていた。それでも愛想が感じられない表情は崩していないのは流石を言うべきだろうか。どこから聞いていたのかはわからない。だが余計な詮索をするなど言う以上詮索されると困ることがあるのだろう。それが何かを問うたところでナイトラは答えはしないのだろう。それがわかつているからなのかクジユは何を言うわけでもなく顎から手を離れた。考

えるのをやめたということを形で示したのかもしれない。

それに納得したのかナイトラは放置したことを謝罪しているのか  
一礼してから申し訳ありませんでしたと心のコもっていない言葉を  
口にした。

## 継ぎ接ぎ安全地帯

あれからシーナは仕事が忙しいそうのでそれに代わるようナイトラが二人を監視した。世話などいう暖かくも友好的な雰囲気は一切なく逃げ出さないように見張っているというのが最も相応しい。ウォルはなんとかナイトラと親しくなろうと努力はしていたが無駄に終わり、クジユはそもそもそんな考えは持っていなかった。ナイトラとは睨み合うことが多かった。何度となく訪れた一触即発の空気をウォルがなんとか抑えて、ようやく夕方になる。仕事で忙しかつたらしいシーナがようやく落ち着いてきたのか夕食であることを伝えに顔を出したことでようやく落ち着いた雰囲気になり始めた。

豪華な料理がずらり並んでいる中わずかな間ですっかり仲が悪くなってしまったクジユとナイトラがお互い目が合う度に数分睨み合う。それだけで殺伐としてしまう空気をなんとか壊そうとウォルは尽力した。

「シーナさんの作る料理はどれもおいしそうですね」

「ありがとうございます」

仕事中だからなのかシーナは空になった皿を下げたり、新しい料理を持ってきたりを繰り返すばかりで椅子に腰かけようとさえしない。仕事中なら無理に誘うのも良くないかと思いつつウォルが食事をしているナイトラが急に立ち上がった。

「ん？」

何事かとウォルがナイトラを見ているとナイトラは舌打ち混じりに踵を返すと部屋を出て行ってしまった。二人が意味がわからず首を傾げているとナイトラの行動をシーナが補足した。

「また王から電話があつたみたいですよ」

そう言われて耳を澄ましてみれば確かに電話が鳴っているような……気がしなくもない。こんなかすかな音にナイトラはすぐに反応出来るのか。そんな風に感心していると乱暴に子機を取る音が聞こえた。余程機嫌を損ねているのか。

「ナイトラさんに愚痴でも言ってるんでしょうか？」

騎士と王なのだからもつと込みいった話もあるのかもしれないがウォルの発想慮奥では浮かぶのはせいぜいこのくらいだ。冗談半分で言ってみたのだがシーナは困ったようにそうかもしれないねとだけ言つて笑つた。

「この国は平和すぎて王が揚げ足を取られていると聞いた」

「そう、ですね」

「お前と王が交際していることで国民は我先にと嬉々して批判をしている」

「返す言葉もありません」

これまでどれほどの辛酸を舐めてきたのか彼女の表情が苦痛に歪む。それでもここに留まり続けるのは離れたくないからなのか、離れられないのか。第三者にそんなことが判断出来るはずもない。

「いつか状況が改善されるといいですね」

そんな当たり障りのないことをウォルが言つてシーナが頷く。状況を改善するためにここに呼ばれているわけなのだがそのことには互いに触れずに茶番のようなやり取りをいくつか交わした。

ウォルはクジユと旅をしている。旅を始めたのは数年前の話だがそれよりもずっと昔、気付けば物心ついた頃からクジユとは一緒にいたように思う。それでもクジユの全てがわかっていているわけではない。わからないことも未だに多い。今回もまたウォルはクジユの考えが理解出来ずに困惑していた。

あれから結局ナイトラは通話を続けていて戻ってくる様子はなかった。そのため食事を終えた二人は部屋へと戻り、一息つく。ベッドにダイブしたウォルをクジユが埃がたつという理由で咎めたが気にしない。これくらい自由にさせてもらわなければ息が詰まってしまう。

「クジユ、今回はよく喋りますね」

「……そうか？」

その返答で無意識だったのかと納得する。クジユは特殊な声をもっているせいで普段はほとんど口を開かない。しかし今回ここに連れて来られてからはクジユは当社比ではあるがよく喋る。そう言ったところでクジユは否定するのだろうかクジユが多弁になっているのは事実だ。これはずっと一緒にいたウォルだけが知っている。

「クジユは何が気にかかっているんですか？」

「……別に。ただの好奇心だ」

「そう」

これ以上問うてもウォルの求めているような返答はもらえそうもなかった。こうしている間にもこの呑気さが自分の首を絞めているのではないかと不安にあるがクジユが留まると言ったのだからクジ

ユの気が済むまだここにしようと思う。そんなことを口にすればクジユはこれ以上なく嫌そうな顔をして気持ち悪いことを言うなど咳くに決まっているので言わないが。

「おい」

「ん？」

「ん？ じゃない。何寝ようとしてる。寝巻に着替える」

「いいじゃないですか。クジユは神経質すぎるんですよ」

「なっ……！？」

誰が神経質だ。憤慨したクジユがそう怒声を飛ばすよりも早くベッドに潜り込んで視界を覆ってしまう。クジユが何を考えているかわからなくて、教えてもらえない以上ウォルに出来るのは待つことだけだった。

そうしてウォルは深い眠りに落ちる。意識の端でクジユに頭を撫でられたような気がした。

## 泣き虫キング

今日は早くに目が覚めた。

時計を見ればまだ朝と呼ぶにはまだ早い気もする。退屈なのでウォルを起こそうかと考えたが「こんなに早く目が覚めるなんて歳とったんですね」と皮肉を返されるような気がしたので起こさないことにする。結局昨日と同じ服のまま眠ってしまったウォルを起こさないように慎重にベッドから出た。ベッドは別々だがあまり大きな音をたててしまえば目を覚ましてしまいかもしれない。身体をベッドから受けさせた瞬間にベッドが軋んで音をたてたがそれでもウォルが目覚めなかったことに安堵する。

早朝独特の冷気に身を震わせながら特に目的もなく部屋を出る。ゆっくりとドアを押し出して出来るだけ音をたてないように神経を集中させた。身体がなんとか通るくらいまで開けて、身体をその隙間に滑り込ませて部屋を出る。慎重にドアを閉めるがドアが完全に閉まった瞬間の金属音がやけに大きく響いてしまった。

何も考えずにとりあえず部屋を出てきたのでこれからどうしたのかと冷えた手に息を吐きつけながら考える。ふと、人影が目止まった。

「あ」

ちょうど角を曲がって死角から姿を現したのは昨日出掛けたチエツクだった。どうやら今帰って来たらしく昨日と同じ服を着ていた。睡眠を取っていないのか目にはうっすらと隈が出来ている。顔には疲労が色濃く浮き出していたがクジユに気付いた途端それは笑顔に塗り潰されてしまった。

「よう、出迎えか？」

そういつた解釈が出来るとは幸せな脳をしているな、と思うのだが疲弊しているチエックに声を聞かせて更に疲れさせてしまうのも酷だろうと無言を貫く。チエックは気分を害した様子もなく歩み寄ってくる。遠目には気付かなかったのだが至近距離でその顔を見ればその顔には泣き腫らした跡があった。

「ん？ 俺の顔に何かついてるか？」

ぺたぺたと無遠慮に自身の顔を触りながら心配そうに問うチエックにどう答えたものかとしばし悩んだ後無言で目の少し下を指差せばそれで理解したのかチエックは「あー」と意味を為さない母音を吐き出した。それからばつが悪そうに頭を掻いてから目を逸らして口を開く。

「意外に泣き虫なんだよ。出来ればスルーしてもらえれば嬉しかったんだけどな」

そうは言うがそれなら顔を洗うなりして泣いた跡を消してくれば良かったのではないかと思う。わざわざ口に出して言うほどのことでもないで口にすることはない。

チエックは眠いのか大きく欠伸を零すと欠伸のせいで目尻に溜まった涙を拭う。

「で、どうだ？ 俺の依頼、受ける気になったか？」

「……何度も言うが現実的に考えて無理だ」

「そりゃ残念。それでも一応命令なんだがな」

脅迫か。クジュの声を聞いてしまったことで気分を害したのかチエックの足元がふらつく。体調が万全でない時にクジュの声を聞く

のは酷だろう。できればクジユも聞かせたくはなかったのだが返答しないでもうにかなりそうな問いではなかったのだ。不可抗力とは言えどこもあからさまに悪影響を受けてしまっているチエツクを見て罪悪感を覚えないわけではなかった。しかしその罪悪感を押し隠してもクジユには今の内に問っておきたいことがひとつあった。部屋に戻って睡眠でもとるつもりなのかクジユを通りすぎて歩き始めた背中に声を投げる。クジユの声を聞くことにチエツクが体調を損ねてしまっているのがわかるがこれで最後だ。

「アンタが本当に消したいのは何だ」

どうにも妙だ。国民の反発的な感情を消してもらいたいという依頼内容は決して長く返答を待てるものではないはずで。それなのにチエツクは催促はしてくるものの依頼を強制させる様子はない。ということはその依頼そのものがフェイクなのではないか。飛躍しすぎだとは思うがクジユはそう考えている。見当違いだと一蹴されればそれはそれでよし。ただの推測でしかないのでこうして鎌をかけてチエツクの反応を窺ってみる。反応はあまり期待していなかったのだが疲弊していたためか、それとも二人きりだったためかチエツクの反応はクジユの予想とは異なっていた。

「さあ？ なんだろうな」

否定をしなかった。その返しは本当に消したいものは別にあると言っていることを同義だ。そしてチエツクはそれをわかった上で発言したように思えた。どう返答したものか。だがこれ以上会話をしてチエツクを無駄に弱らせるのも気が引ける。そんなクジユの躊躇を察してかチエツクは振り向かないまま手を耳あたりまで持ち上げる

と何度か軽く振ってまた歩き始める。  
ちやりちやりと衣服の装飾が擦れる音が廊下に響き渡った。

## お約束のごとく

この日はいつもより遅く目が覚めた。

昨日着替えないままに寝てしまったせいで寝付くまでに時間がかかってしまったからなのかもしれない。ウォルが目を覚ました時、既にベッドにクジユはいなかった。クジユの方が先に目を覚ますことは決して珍しくはないので気に止めない。とりあえずベッドから抜け出てクジユを捜すべく部屋を出ることにした。体重をかけてドアを押し出して廊下に出る。クジユの姿はない。さて、どこに行っただろう。

「あの、クジユ様をお捜しですか？」

躊躇いがちにその声をかけられて慌てて振り返れば洗濯物を大量に抱えたシーナが歩いていった。洗濯物は彼女の顔の半分を覆ってしまっほどもで積もっていた。視界が悪そうな彼女をそのまま放っておくのも気が引けて洗濯物の上半分を奪い取るようにして請け負う。

「半分持ちますよ」

事後承諾になったのはわざわざ許可を取っていれば彼女が遠慮をしてお手伝わしてくれないのではないかと考えたからだっただ。

「え、いえ！ 大丈夫です！ お客さんに持たせるのは申し訳ないですし」

「俺がやりたいだけなので気にしないでください。で、これはどこに持って行けばいいんですか？」

シーナの言葉を無視するようにしてそう答えた後、更に問いを置  
み掛けることで彼女の遠慮をこれ以上口に出させないようにする。  
それをどこまで察したのかシーナは「そういうことでしたら」と言  
って運ぶ先をウォルへ教える。シーナと一緒にウォルがそこへ向か  
おうとしたところで前方に見慣れない影を見つけた。

「ん？」

影はひとつではなかった。彼等は厳格そうな衣装に身を包み、そ  
れまでしてきた苦労を見る者全員に伝えるかのような白髪をしてい  
た。その間から時折白く染まりきっていない黒髪が覗き見える。彼  
等は三人。いずれも気難しそうな表情をそれぞれに作っていた。

彼等は一体誰だろうかとウォルが問おうとシーナに目をやったと  
ころで驚きのあまり硬直する。シーナは目を見開いて彼等を真つ直  
ぐに見ていた。わずかに開いた口からは何かが発されることはない  
が何か発するとするなら悲鳴。そんな印象をウォルが抱いてしまう  
ほどシーナの瞳には恐怖が色濃く宿っていた。

「……シーナ君」

彼等の一人のがさついた唇が動く。ただ名前を呼んだだけなのに  
その声音には批難が含まれているように思えた。そう感じたのはウ  
ォルだけではなかったらしくシーナは勢いよく頭を下げるとすぐ  
上げて廊下の端へと移動した。どうしていいのかわからずウォルも  
それに倣って廊下の端へ行く。

「王でしたら自室にいらつしやると思いますのでいつもの部屋でお  
待ちください。お呼びして参りますので」

緊張しているのかシーナは早口でそう捲し立てる。余程彼等が怖

いのかシーナは彼等を見ようとしない。彼等はそれに気分を害したのか隠しもせず舌打ちをするとシーナとウォルの前を肩で風を切りながら通り過ぎて行く。シーナの前を通り過ぎ、ウォルの前を。

「君」

「はい？」

てつきり存在していないもののように声もかけられないのだばかり思っていたので急に声をかけられて間抜けな声が出た。目が合ってしまったように逸らし続けていた視線を咄嗟に彼等に合わせれば何の感情もこもっていない無機質な瞳達と目が合った。

「っ!？」

「君は客人かね？」

「……まあ、そんなところです」

厳密には拉致というか誘拐というか。彼等がどこまで知っているのかわからないので曖昧にそう返す。彼等は決して興味がないのかすぐにウォルから目を逸らした。

「そうか。それならゆっくりして行くといい」

まるでここを自分の家のように言う。そのことに言いよつた腹立たしさを覚えながらも無難な返しをする。わざわざ喧嘩を売るなんてクジユみたいな真似をするわけにはいかなかった。

「ありがとうございます。そうさせてもらいます」

そんな心にもないことを言えば聞いていたのかいないのか彼等はウォルの前も通り過ぎて行く。彼等が澀みない足取りで角を曲がり、

姿が見えなくなったところで金縛りから解けたようにシーナが動いた。

二、三步後退って壁に身体が当たる。洗濯物を抱えた両手は小刻みに震えていた。

「シーナさん？」

「あの、洗濯物、お願いしてもいいですか。急用が出来てしまって」

ウォルの返答を聞くよりも早く持っていた洗濯物を全てウォルの持っていた洗濯物の上に乗せて、一礼をする。頭を下げたことで垂れ下がった髪を掻き上げてから彼女はウォルが口を挟む暇もなく走り去ってしまった。

「えええ……？ いや、まあいいんですけどね……」

結局クジユの居場所を聞くのを忘れてしまった。そんなことを今更考えながらとりあえずこの洗濯物の山を運び終えてしまおうと歩き出す。

「おっ、と……」

ずり落ちそうになる洗濯物を抱え直して再び足を進めた。

## 主に喧騒

暇過ぎるあまりクジユは官邸を徘徊していた。チエツクは眠ってしまったようだし、シーナは忙しそうだ。ナイトラとは会いたくもない。シーナが鍵のかかかっていない部屋なら自由に出入りしても構わないと許可してくれたのでお言葉に甘えて部屋という部屋に足を踏み入れることで時間を潰していた。

もうそろそろウォルが起きてくる時間だろうか。それならばもう戻ってもいいかもしれない。あらかた徘徊したので飽きもきた。元来た道に戻ろうと踵を返すと何やら物音が聞こえてきた。好奇心が打ち勝つてしまい、思わず曲がり角に隠れて身を潜める。

「またか。……わかった。シーナ、ありがとう。ナイトラ、悪いが一緒に来てもらえるか」

「御命令とあらば」

「またお前そういう堅い返しをだな……」

「王、あまり大臣を待たせては……。私は外で待っていますから、その、すみません」

「なんでシーナが謝るよ」

チエツクとシーナとナイトラがそんな会話をしながらどこかへ向かっている。このままではクジユの潜んでいるところを通るので見つかってしまうだろう。やましいことは何もしてないので偶然通りがかった風を装えばそれでいいのかもしれないが一度隠れてしまった手前その方法をとることは躊躇われた。そのため三人に見つかってしまわないように角を少し行ったところで適当な部屋に身を滑り込ませる。部屋に入ってしまったことで音での情報しか拾えなくなってしまうがそれでも充分だろう。

「第三十二代国王・チェック。参りました」

クジユが入った部屋の一つ手前の部屋で立ち止まったらしいチェックはそう告げると部屋へ入って行く。それに続いてもう一人入室したようだった。護衛をしていると言っていたのでおそらくはナイトラだろう。それならシーナは廊下で待機しているのだろうか。見ることが出来ない分、どうしても推測の域を出ない。

「一か八か近付いてみるべきか？」

いや、しかしそれでは野次馬のようではないか。そんな真似は御免被る。プライドが邪魔してクジユが動き出せないうちにあちらの状況は移り変わっているようだった。

「だ！　と言つて」

「ですから、俺は　しか」

どうやら二人が怒鳴り合っているようだった。一人はチェックだろう。そしてもう一人はわからない。先程シーナが大臣がどうのと言っていたので大臣かもしれない。最初は二人のどなり声ばかりが響いていたが次第に怒鳴り声は増えていった。壁があるせいで内容までは聞き取れないが声が増える度にチェックが不利になっているようなのはなんとなく察することが出来た。

「……」

どういふ状況なのかというのはいくはわからない。もしかするとチェックの自業自得なのかもしれないし、大臣に難癖をつけられているだけなのかもしれない。部外者であるチェックにはそれを判断することは出来ない。それが歯痒くもあるが仕方がないことだ。糾弾

されているらしいチエックに同情を覚えないわけではないがだからと言ってどうすることも出来ない。

クジユはどうすることも出来ずにしばし身を潜め続けていると怒声はだんだんとおさまっていき最後には聞こえなくなった。落ち着いて音量を下げて話すことにしたのか、会話自体が終了したのか。しばし沈黙が続いたかと思えばドアが重々しく開く音が届いた。ドアが開け放されたおかげが会話を聞きとることが出来る。

「何度もしつこく言いますが貴方は王なのです。いつまでも駄々を捏ねていては国民に示しがつきませぬぞ」

何度も繰り返し言われ続けてきたことなのかチエックは聞こえないとばかりに返事をしない。それに対して憤っているのか大臣達はクジユにさえ聞き取れるほど乱暴な足取りで部屋を出て行ったようだった。大臣の気はどうにも治まらないようで憤りは脇に控えていたらしいナイトラにも飛び火した。

「君も頑固な主君を持つと大変だな」

「仕事ですから」

「……ふん」

ナイトラの冷めた反応が気に入らなかつたのか大臣は鼻を鳴らす。その足音はどんどん遠のいて行つた。シーナの見送りを断つて帰って行く大臣達はシーナを嫌っているのだらう。そう思えるほどに彼等のシーナへの対応は冷めきっていた。大臣達の足音が聞こえなくなったあたりでシーナがチエックの名を呼んだ。

「チエック、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫。心配すんな。俺の方こそいつも、」

「王、それ以上は」

チエックが何かを言おうとしたところでナイトラがそれを遮る。緊張感を纏ったその声はこちらへ向けられているのではないかと錯覚してしまうほど鋭かった。実際、ナイトラの意識はクジユに向けられていたのかもしれない。クジユの気配に気づいていたからチエックの言葉を遮った。そう思えばますますクジユにはナイトラが気に食わなかった。

「チツ……」

それでもこれまで三人に対して持っていた違和感はクジユの中で確実に拡大しつつあった。出来ればウォルが何も察することがないまま終わってほしいのだがそれは難しいだろう。

「あー……」

絶えず呟くことで自身の声に侵食される不快感を味わいながらもクジユはその場に丸まって頭を抱えた。じわじわと内側から侵されていく感覚が思考力を奪っていくが今はこれぐらいがちょうどいいのかもしれない。

## NOT以心伝心

「あ、クジユ。どこに行ってたんですか？」

「それはこっちの台詞だ。部屋にいなかったら」

「シーナさんに頼まれて手伝いをしてたんですよ」

呑気にウォルがそう言うので一気に疲れが襲ってくる。部屋まで戻ってきてウォルの姿が見当たらないことにクジユが動揺していると何食わぬ顔でウォルが戻ってきたのだ。長い間息を殺していたせいかクジユがかなり疲れ切っていた。おまけにウォルと離れていたので自身の声に侵されたままになってしまっている。気持ち悪さのあまり額に汗が滲む。吐き気すらも襲ってくるが吐いても楽にならないのはわかっていた。

「ウォル、何でもいいから喋れ」

一々説明するのが面倒でそれだけ言えばウォルは状況を察したようだった。ウォルはクジユにとつてなくてはならない存在だった。クジユの声は特殊で聞いたものの神経を次第に侵していく。それは声の主であるクジユも例外ではなく、そうなれば一番被害が大きいのはクジユであるはずだった。しかし幸運なことにウォルはクジユとは正反対の性質を持っていた。クジユの声質が穢すことならウォルの声質は浄化することだった。

「さつきナイトラさんがクジユのこと捜してましたけど何かしたんですか？」

答えない。やはりナイトラは気付いていたらしい。そうでなければあの愛想のない人間がわざわざクジユを捜すはずがない。ウォル

も何か感づいてはいるのだろうか。それ以上は聞いてこない。黒ずんだ液体の中に水のようなその声をひとつ垂らせばそれだけでその黒全てを浄化出来るのではないかと思えるほど澄んだウォルの声はクジユの中に堆積するどす黒いものを浄化していった。ただ、ウォルの声も悪影響を全く及ぼさないわけではない。クジユの声がクジユ自身を侵すようにウォルの声はウォル自身も浄化を始めてしまう。

「……もういい」

気分の悪さが消え失せたところでそう言っ手を手を軽く振る。それでもまだ口を開こうとするウォルの口を手で塞いで黙らせた。中途半端に口を開いたせいでウォルの口からはおかしな声が漏れる。

わざわざこちらからナイトラに会いに行く必要もないだろう。用件があるのならあちらから来ればいいと思う。奴等はまだ二人を殺さない。目標を達成していないからだ。それがわかっていいるからクジユは布団にもう一度潜り込む。体調は万全ではないし、起きていたところであの三人のいずれかに監視されて窮屈な一日を過ごすことになるのだろう。それならば寝ていた方がよっぽど有意義だ。

どうしていいのかわからず戸惑うウォルの腕を掴んで布団の中へ引つ張り込んだ。困惑を滲ませるウォルに気付かないふりをしてその腕を離すまいと力を込めればウォルが諦めたらしく脱力した。それに満足してからクジユはこれからどうするべきかと考える。どうにも彼等は何かを隠しているような気がするのだ。それがわからない以上はどう動いていいのかもわからない。それがもしクジユの手に負えないようなものだったとしたらなんとしてもウォルだけは生かさなければと思う。そしてその誓いをウォルに気取られてしまわないように早々に目を閉じると眠りに身を委ねた。

## うっかり絶体絶命

ここ数日は窮屈な思いをして過ごした。

逃げ出さないようにするためなのかほぼ二十四時間二人には誰かの世話係という名の監視が張りついていた。クジュなどは露骨に嫌そうな顔をしたがウォルはさほど苦痛には感じていなかった。というのもチェック以外からは依頼の話を一切されないからだろう。クジュはナイトラを嫌っている上になんだかチェックを避けているようで、どちらかが監視につくと嫌な顔をする。でも何やら忙しいのかチェックとナイトラは片方、もしくは両者が不在であることが多かった。シーナにそれとなく聞いた話によれば民衆の不満が爆発寸前で王であるチェックとその護衛であるナイトラは多忙なのだそうだ。

それならば何故クジュに依頼を受けるように催促をしないのか。例えばウォルを人質にとつて脅すだとか、無理に従わせようとするなら方法はいくつもあると思うのだがチェックはそれらを実行しようとする様子はなかった。ウォルにはそれが不思議で仕方ない。今こそクジュを使う時ではないのだろうか。わざわざそれを指摘してこちらが不利になる必要もないかと思いきや口を噤んでいるのだが官邸にいる全員がそれに気付いていないとは到底思えなかった。

そして今日は今日で何かあったらしくチェックが正装で一番豪華そうな部屋へ入って行くのを見かけた。それにナイトラとシーナが続く。特に大人しくしているなどという指示はなかったのでウォルは物音を極力たてないようにクジュの元へと急いだ。靴と床が擦れて音をたてないように足を上げて、音をたてないように足を床に下ろす。その作業を何度も繰り返してなんとかクジュがまだ寝ている部屋へと辿り着く。最近クジュはやる気がないのか自堕落になってしまっていた。

「クジユ、起きてください」

あまり声を大きくしてしまわないように注意しながらクジユが潜って膨らんでいる布団を軽く叩く。しかしクジユが起きる様子はなくわずかに身じろぎをしただけだった。素直に起きてくれるとは思っていなかったので仕方なくの端を握る。それから下から上へ持ち上げるようにして布団をクジユから引き剥がす。布団の中で丸まっていたクジユは差しこんできた太陽光が眩しかったのか目を細めた。

「……眩しい。布団おろせ」

「起きてくださいよ」

クジユの苦情は無視して先程見たものを話す。いつもと様子が違ったことを強調して話すと食いついてきたのかクジユが身を起こした。それでもまだ眠いのか目は半開きで眉間には不機嫌さからくるのか深い皺が刻まれている。起こされて不機嫌になるのなら自分で起きればいいのではないかと思う。

「……寝巻なんだが」

「知らないですよ。俺だって寝巻ですし」

着替えの場所を知らないのだから着替えようがない。それに寝巻といってもほとんど部屋着に近いもので一見しただけで寝巻だと気付かれてしまうことはないだろう。要はクジユは気にしすぎなのだ。渋るクジユの手を取れば観念したらしくベッドから緩慢な動作で出てきた。

「俺達的能力が透視だったりすれば部屋の中堂々を覗けるんですけどね」

「で、また余計な代償背負うつもりか？」

「別にそういうわけじゃないですけど」

ウォルとクジユは、特殊な力を持っている代わりにそれを使用する度に相応の代償を負う。ウォルは授かった以上仕方のないことだと割り切っているのだがクジユはそうでもないようだ。未だにウォルとクジユ自身の能力を毛嫌いしている節があった。それなのに能力のことについて軽々しく話すウォルが気に障ったのだろう。それは悪かったと思う。でもそんなに怒る必要もないのではないかと思う。寝起きで不機嫌だからといって八つ当たりはやめてほしい。

三人が入って行った部屋まで案内するためにウォルが先を歩く。そういえばこの官邸は相当に広いはずなのだがあまり人を見かけたことがなかった。今までは誰かが必ずと言っていいほど監視にしていたのでそこまで意識はしていなかったのだがこうして二人きりになってみるとこの官邸の静けさは異様だった。靴と床が擦れる音さえもこの静寂の中ではひどく大きく響いてしまう。足跡を潜めていたいこの状況からすれば煩わしいことこの上ない。文句を呟くことも憚られてただ目的の部屋を目指して足を進める。背後でクジユが緊張感なく欠伸を漏らした。

「ここです」

無駄に長い廊下を通過して突き当たったドアを指差せばクジユがもう一度欠伸。本当にやる気が感じられない。こんなことなら一人で来るべきだったかもしれない。ウォルが早くも後悔し始めているとクジユはウォルより前へ進み出ると音もなくドアへ張りついた。

「ちよつ、クジユ？」

ドアの向こうに悟られてしまわないように声を抑えながらクジユの行動を咎める。気付かれてしまったら最後、殺されかねない状況

に自分達が置かれているということを知っているのだろうか。否、自覚していないに違いない。クジユを引き戻そうと手を伸ばしたところでクジユがそれよりも早くドアの隙間に手をのばした。そろそろと隙間に指を差しこんでわずかな隙間を作ったクジユは顔を近づけて中を覗きこむ。

流石に二人で覗くのは勢い余ってドアを開けてしまっなんてお約束なパターンに陥ってしまいそうなのでウォルは隙間から横へずれた。あちらの視界に万が一にも入ってしまったないようにするためだ。

中央の豪華そうな椅子には王であるチェックが深く腰掛けていた。その横には剣に手を置いたナイトラが控えている。その少し離れたところにはシーナが壁沿いに遠慮がちに控えていた。そしてチェックの正面には腰に剣を携えた使者が跪いている。

流石は王と言うべきかこれまでクジユはチェックに対してあまり厳格なイメージは抱いていなかったのだがその表情は固く引き締められていて、普段のだらしない雰囲気は一切感じられなかった。ナイトラは普段と変わらず仏頂面ながらも使者に遠慮のない殺意を飛ばしていた。射るような目はそれだけで使者を殺してしまいそうだ。シーナはここにいることが場違いだということがわかって居るのか居心地が悪そうに視線だけを泳がせていた。

「この度は如何様か」

普段はどこか間延びした喋り方をするくせにチェックは淡々とその使者へ問う。その声音には一切優しさといった類のものは含まれていないようだった。いつもこんな調子なのか、それとも今回が特別なのか。

使者は特に怯んだ様子もなく「はっ」と口にすると顔を上げてチェックと目を合わせた。

「何度か忠告させていただいたあの件について大臣より伝言を預かっております」

「やっぱりそれか」

何度も言われ続けていることなのかそれを聞いた途端チエックがうんざりした顔を作る。シーナが申し訳なさそうに俯くがナイトラの表情に一切変化は見られなかった。主君と姉の問題だというのに随分冷めた反応だと思いがクジユにとってそんなことは大した問題でもない。

使者はチエックが露骨に聞きたくないといった表情をしているにも関わらず続けた。子供のように感情をすぐに表情に出してしまうチエックを快く思わないのか咎めるように「王」と呼んでから使者は続けた。

「我々も王の御意志を尊重したいのです。しかし身分を越えてはなりません。これはこの国が遙か昔より遵守してきたことです。それを王が易々と破ってしまうわけにはいかないのです。どうか御理解を」

理解を乞うように再び頭を垂れた使者をチエックは困り果てた表情で見下ろす。どう返答するべきか迷っているのかその憂鬱を凝縮したように思われる深い溜息を吐き出した。

「何度も言ったとは思いますが俺は譲るつもりはない」

「……そうですか。それで国民の不満が募ったとしてもですか？」

「どうせ何してもぶーぶー言われるなら好きなようにさせろ」

何度も同じやり取りを繰り返してきたのかチエックの言葉にはあきらかな疲弊が含まれていた。その返答を聞いて使者が申し訳なさ

そつに目を伏せる。

「そうですか。では仕方ないですね」

使者は視線を落したまま腰の剣へ手をやる。それを一瞥したナイトラの眉間に皺が寄った。そしてチェックは逆に面白そつに口端を吊り上げる。よく事情を知らないクジュにもこの後の展開は安易に想像出来たがチェックはそれを楽しんでいるようだった。

「で、どうするんだ？」

おかしくてたまらないとばかりに口許を緩めるチェックをナイトラが横目で睨みつける。それもそつだ。守るべき者がこつも緊張感を欠いていれば守りにくい。毎日こんな様子のチェックを守っているのかと思うとナイトラに同情してしまう。

「はい、それならば」

鯉口を切つた使者は先程までの申し訳なさそつな表情に無表情を上塗りした。それを視認したナイトラが剣に手をかけたのと使者が動き出したのは同時だった。

「消えてもらつまでです！」

剣を引き抜いた使者が床を蹴つて駆け出す。ナイトラはチェックを守るために庇つように前に立ちはだかると剣を引き抜く。しかし使者はそれを一瞥すると方向転換をして再び駆け出した。使者の視線の先にいるのはシーナ。最初から使者の狙いはシーナだったようだ。チェックがシーナの名を叫び、ナイトラが舌打ち混じりに使者の背中を追つ。シーナは恐怖に震える足を叱咤して逃げ出すとその

時点で使者はかなりの距離を詰めていた。足をもつれさせながらもなんとか逃げていたシーナは動揺のせいかバランスを崩し、床に転がってしまふ。彼女の眼前にまで迫った使者は剣を振り上げた。しかしそれを振り下ろすよりも早くナイトラアが追いつき剣を構える。剣を振り下ろすのを阻止しようとして動き出したところで使者は素早くナイトラへ方向転換すると振り上げていた剣をナイトラへ斜めに振り下ろした。ナイトラはすかさず後方へ飛び退いたが攻撃の全てを回避することは出来ず、剣の動きに沿って服が裂け、赤い線を作りだす。

「最初から、これが狙いか」

「王の騎士は大変優秀だと聞いておりましたので」

ナイトラの呟きでクジユはようやく理解する。チエックを殺そうとしたところでナイトラが妨害するのはわかりきっている。だから先にナイトラを始末してしまわなければならない。だから使者はシーナを狙ったと見せかけてナイトラが来たところを素早く身を翻してナイトラに目標を定め、傷を負わせた。ナイトラの行動を予測していないと出来ない計画ではあるが使者の読み通りに動き、傷を負った。傷口は深くはないようだが血が重力に従って滴り落ちている。

「利き腕の負傷は多少なりとも貴方に不利に働くはずですよ」

「利き腕の負傷如きで護衛がつとまらなくなる者は騎士とは言えない。王の騎士を甘く見るな」

使者の挑発に冷たく返したナイトラは使者に攻撃を仕掛けるがやはり利き腕の負傷は大きいようで使者に軽々と受けられてしまった。舌打ち混じりにナイトラは身を引いて耐性を整える。使者は優勢にも関わらず気は抜いていないようでナイトラを睨みつけていた。

「ナイトラ、もういい！ 下がれ」

「ふざけんな。もういいってなんだ、死ぬ気がアンタ」

チエツクの言葉に対してナイトラは一瞥されることもなくそう返した。最早王に対する言葉遣いではないのだがそれに対する疑問を投げる者はこの場にはいなかった。そんな余裕がないと言った方が正しいのか。二人が戦っている間に起き上がったいたシーナはチエツクの傍まで駆け寄るとチエツクに逃げるように促した。しかしチエツクは首を横に振る。そして逃げるどころか睨み合っている二人の方へ歩み寄った。

「王！ お戻りください！ 駄目です！」

シーナは叫ぶが恐怖で動けないのか直接チエツクを引きとめることはしない。それをいいことにチエツクは未だにお互いに牽制を続ける二人の間に割って入る。本来なら制止しなければいけないはずのナイトラもあまりに唐突な行動に呆気にとられているようだった。しかしすぐに正気に戻ったようでチエツクの肩を掴むと強引に後ろへ下がらせようとす。だがチエツクが動く様子は見られなかった。チエツクは使者を真つ直ぐ見据える。

「それが国の方針なら仕方ないな。殺したいならさっさと殺せばいいだろ」

疲弊しきった表情で言うチエツクの言葉は本音だろうか。クジユの位置からは使者の顔は見えないがそれでも動揺は伝わって来た。それでも使者の任務はチエツクを抹殺することだ。それを違えることとはないだろう。その証拠に使者は剣を強く握り直した。そして剣を突き出そうとしたところでナイトラがチエツクの首根っこを掴んで思い切り後ろへ引き倒す。

「うおっ!？」

「倒れてろ、馬鹿王」

ナイトラは腰を落とすと使者の突きを回避する。それから剣を逆に構えると柄を使者の鳩尾に埋め込む。突然のことに使者がくの字に折れ曲がった。今の一撃で使者は意識を失ったのか体重全てがナイトラにかかる。ナイトラはそれを軽々と受け止めると刀を戻してからクジユを睨みつけた。

「この馬鹿が。アンタ今何しようとした」

これは確実に王に対する態度ではない。しかしチエックはそれを咎めない。それはシーナも同じで、ただシーナは心配そうな目で二人を見ているだけだった。視線だけで殺してしまえるのではないだろうかと錯覚してしまうくらい怒気が含まれたナイトラの視線をチエックは軽々と受け流す。それからナイトラに身体を預ける使者を一瞥した。

「それよりもそいつどうするか考えようぜ。始末すればそれこそ問題になっちまう」

わざとらしく話題を逸らしたチエックにナイトラが盛大な舌打ち。チエックはそれを無視すると顎に手を置いて考え事を始めた。シーナはしばらく状況に追いつけず固まっていたがナイトラの傷に目がいくと弾かれたように走り出した。

「救急箱取ってきますす!」

あまりに突然の行動で慌てたのはクジユの方だ。慌てて周りを見

渡すが隠れられそうなどころはないし、別の部屋に隠れようにも部屋まで移動している間にこちらに向かってくるシーナの視界に入ってしまう。どうしたものかと考えたのは一瞬でどうするべきかなんて決まっていた。

「へ？　ちよつ、クジユ」

咄嗟のことでウォルが制止しようとするがそれを無視してドアを思い切り押し開けた。同時にシーナが引き攣った悲鳴と共に足を止め、チエックとナイトラが驚愕の表情でこちらを見ている。どうやら今回は気付かれていなかったらしい。三人が直面している問題を解決する提案をしてやろうと思ったが声のせいで憚られて、振り返ってウォルに視線を投げた。まだ隠れていたウォルはそれで観念したのかドアの陰から申し訳なさそうに姿を現すとクジユの考えている提案をクジユに変わって口にした。

「お困りのようですね。皆さんご存じかと思いますがクジユはちよつと特殊なんです。よろしければ協力しますよ」

そう言っではみるもののクジユの考えが読めないのかウォルは不安げな視線を投げてる。だがそれを今わざわざクジユに伝える必要はないだろう。その視線には気付かないふりをして三人を見た。

何を隠しているのか知らないがこの機会にさっさと暴いてしまおう。こんなところにもいつまでも留まっているほど暇ではないのだ。

## 整理整頓

ソファーに身を投げ出したクジユはぐったりとしていた。全力疾走した直後のように身体は汗ばんでいて息苦しそうに時折咳き込む血の気が引いて青褪めている顔を両腕を交差させることで覆い隠して息を整えることに専念している。そんなクジユに声をかけることはせずにウォルはウォルのやるべきことをすることにした。

「おい、大丈夫なのか？」

「あの、何か持つてきましようか？」

チエックが心配に表情を曇らせ、シーナが腰を上げる。しかしウォルはシーナを制した。

「いえ、大丈夫です。あれをやった後のクジユはいつもこんな感じですから。しばらくすれば治りますし」

喋る余裕もないのか黙り込んでいるクジユの背中をさすりながらそう説明する。

先程チエックを抹殺しようとした使者は捕獲され、彼をこれからどうするべきか審議されていた。そこでウォルがクジユの指示により提案したのは使者の記憶を消してしまうことだった。そもそもクジユが記憶を消すことが出来るということを知った上でチエックが連れてきていたのだからその辺りの説明は省くことが出来た。いくつかの手順を踏んで使者の記憶をクジユが消し、解放した。その反動というか副作用でクジユはこうして体調を崩しているわけなのだがそれを見慣れているウォルからすればそこまで心配することでもない。心配は心配なのだが治るとわかっているものに気をかけすぎても仕方ないだろう。

「それよりさつきからナイトラさんの姿が見えないんですけどどう

かされたんですか？」

使者を送り返した後、チェックとシーナは弱ったクジユを休ませるために部屋に案内してくれていた。クジユを支えながらこの部屋で休ませてもらっていたので最初は周りを見渡す余裕もなかったのだが次第に余裕が出来てきたところそのことに気付いた。

「あれ？ そういえばさつきから見ねえな。シーナ、知らないか？」

「……そういえば、私も見てないです」

「そうか」

シーナの返答を受けてチェックは立ち上がった。同じ姿勢でいたせいで身体が固まっていたのか両腕の上に突きあげて背伸びをすると踵を返して部屋を出て行った。どうやらナイトラを捜しに行ってくるらしい。少しくらい説明をしてくれてもいいのではないかと思うのだがシーナは慣れているのか何も言わなかった。

「お茶でも淹れますね」

部屋の隅の棚に置かれているポットを掴むとその横に置いてあるティーポットに茶葉を適当に放り込んでからポットの上部を押してお湯を注いだ。各部屋を見て回って思っではいたのだがどうやら全部屋にポットとティーポットが置かれているらしい。湯の入れ替えが大変ではないかと思うのだが。シーナはカップを二つ棚の中から取り出すとティーポットを少し傾けた。褐色をした液体がティーカップからカップへ注がれる。慣れた手つきに感心しているとシーナはその視線を受け流しながら一つ目のカップに注ぎ終え、と二つ目のカップに注ぎ始める。

「すみません、いつも騒がしくて」

「いえ、大丈夫ですよ。それよりも少し聞きたいことがあるんですけどいいですか？」

「私が答えられる範囲なら」

シーナが微笑みながらそう返してくれたのでクジユを一瞥してから口を開く。どうやらクジユはまだ喋ることが出来る状態ではないらしい。先程よりは落ち着いたようだったが未だに顔色は悪くぐったりとしていた。

「ナイトラさんはチエツクさんが嫌いなんですか？」

「私の口からはなんとも。本人から聞くのが一番いいと思います」

シーナは自分の口からその問いに答える気はないらしく注ぎ終わったカップをクジユとウォルの前へ置いた。仕事だからなのか笑みは絶やさない。お茶をありがたく受け取って啜りながらクジユの肩を叩いてお茶をいただいたことを知らせる。すると両手を顔から離して一度深く息を吐くと背中をソファから離してカップを手に取った。未だに顔色は悪い。カップに口をつけてちびちびと飲み始めたクジユの視線は下がっていてシーナを見ようとはしない。体調の悪さを押し隠すように深呼吸を何度か繰り返してからクジユは顔を上げてシーナを見た。その表情は彼女の小さな変化も見逃すまいとしているようでシーナは困惑した表情でウォルを見る。助けを求められているのだろうか。しかしウォルにもクジユのはっきりとした意図はわからないので助けようがない。

「……お前は？」

「はい？」

クジユが口を開くことは予想していたのかシーナは怯える様子もなくクジユを見た。わかっていてもクジユの声を不快に感じてしま

うのはどうしようもないらしくその額には汗が伝った。それを見てこれ以上言葉を重ねるのは酷だと思ったのかクジユはカップを両手で持った体勢のままちらりとウォルを一瞥した。意味を理解しきれていないシーナに質問を補足して伝えるということだろうか。それ自体は構わないのだがウォルがクジユの意図を汲みとれていないという可能性を考えていないことが気にかかった。しかしそれを問っても仕方がないのでクジユの指示通り補足を請け負おう。

「シーナさんはチェックさんのこと好きなんですか？」

シーナとチェックは付き合っているという。それならば当然シーナはチェックを好きはずだ。この質問に意味があるとは思えない。しかしクジユがこんな質問をするということは意味があると感じているからだろう。どうせ問い詰めたところで真意は教えてもらえないのだから大人しく指示に従っておこうと思う。

「わ、私は……」

シーナは質問を受けてかなり動揺しているらしく目を絶え間なく泳がせた。唇は小刻みに震えていて言葉を発することも難しいようだ。当然の質問をしたただけなのにシーナがここまでうるたえる理由がウォルにはわからなかった。クジユにはわかっているのだろうか。そんな思いを抱きながらクジユを見ればクジユは睨むようにシーナをまっすぐに見ていた。そこに感情が込められている様子はなく、下手をすれば淡々とした殺意すらも感じた。

「クジユ、その顔怖いです。シーナさんが怖がってるじゃないですか」

実際にシーナが怖がっているかどうかはわからない。だが他者を

そんな目で見るというのはどうかと思う。言外にそう非難したのだ  
がそれがクジュに伝わったかどうかはわからない。クジュの反応を  
知るよりも早く、異変が起こったのだ。

空気を切り裂くように強烈な破壊音が響いて思わずウォルは身を  
竦ませる。何か割れたのは確かだろうがそれが何かを特定するこ  
とは出来なかった。陶器か何かだろうか。それよりも今一番気にな  
るのは音が聞こえてきた方向だ。

「えーと、俺の記憶が正しければチェックさんが行った方向から音  
が聞こえてきたと思うんですけど」

控えめに意見して自らの記憶が正しいという確信を持つとすれ  
ばシーナが今にも躓きそうな危なっかしい動作で部屋を出ようと駆  
け出した。クジュも未だに具合が悪いながらもそれに構うことなく  
シーナの後を追う。しかし身体が重いのはどうしようもないのかそ  
の足取りは緩慢だった。それに苛立ったクジュが舌打ちを漏らすの  
で肩を貸して歩き出す。手を借りることが気に入らないのか悔しげ  
な表情をされたが言い合っている場合でもないので気付かないふり  
をしてシーナの後をゆっくりとした足取りで追うことにした。

## 秘密

二人がシーナに追いついたのは五分ほど後だったと思う。ここは無駄に広いので追いつくのにやたらと時間がかかってしまった。まだ事態は収拾していないらしく怒鳴り声が響いていた。

「シーナさん、大丈夫ですか？」

クジユを半ば引き摺るようにしてなんとか追いつけばシーナは扉近くでどうしていいのかわからずひたすらに周りをうろついていた。何度かやめてくださいという悲痛な叫びが聞こえてきたがチェックとナイトラはそれに耳を貸していないようだった。

クジユを離して、クジユが壁に寄り掛かったのを見届けてから部屋の中を覗けば漫画のようなタイミングで目の前を陶器がもの凄いスピードで通過していった。鼻先を掠めた陶器は減速しないまま廊下の壁に直撃して粉々に砕ける。驚きのあまり身体を仰け反らすのが当の本人たちは全くこちらのことなど気にしていないようだった。

「こんつの馬鹿が！ 王が騎士庇おうとしてどうする！」

「お前こそ王になんて口ききやがる！ お前なんて騎士失格だ！」

「はっ、なんとでも！ どうせ俺は騎士失格だ。で、それが何か？」

喧嘩の内容は理解出来るような、出来ないような。どうやら先程チェックガナイトラを庇うような動きを見せたのがナイトラの怒りに火をつけているようだった。しかしそれだけでここまで身分を無視した大喧嘩が勃発するものなのだろうか。ウォルには理解出来ない。クジユは壁を支えに何とかドア付近まで歩いてくると中を覗きこんだ。

部屋の中は酷い有様だった。お互いに投げつけたと思われる陶器

などの残骸は部屋中に散らばっていつ怪我をしてしまわないとも限らないような状態だ。武器まで持ち出して喧嘩をしていたのか棚には真新しい切りつけられた傷がいくつも見受けられた。しかし武器は二人の手元にはなく投げ出したように不規則に床へ破片に混じって転がっている。

「お前はいつもそうだ！ 身分がどうこうって、関係ないだろうが！」

「関係ないわけないだろ馬鹿王。少しは頭冷やせ」  
「誰が馬鹿だ！」

チエックの方が不利なのかナイトラが見下すように淡々とそう返す。するとチエックの怒りに触れたのかチエックは近くの棚の引き出しを勢いよく引くと中に整頓して収納されていた宝石の散りばめられている装飾品を取り出した。手に収まるサイズの鏡を掴み出すとそれをナイトラに向けて全力投球する。ナイトラがそれを回避すればチエックは引き出しの中から指輪を取り出して投げつけた。それにも宝石が埋め込まれていたりするのだろうかウォルの位置からはよく見えなかった。

「もう、やめてください！ 二人とも、お願いですから！」

そう懇願するシーナは涙を流していた。それでも部屋の中に入ることは出来ないようでドア付近で足が止まっていた。クジユは何も言わず険しい表情で喧嘩を続行する二人を眺めている。その険しさは体調の悪さからくるのか、それとも別の何かからくるのかはウォルには読み取ることが出来なかった。

「俺は！ 俺はなああ！」

次から次へと物を手当たり次第に投げつけるチエックはそのうちに涙声へと変質していき、それに呼応するようにナイトラは投げつけられた物を避けることを唐突にやめた。それは泣きだしそうになっっているチエックに対して驚いているようでもあったし他にも意図があるように思えなくもなかった。

チエックが投げつけた物のひとつである鋏はナイトラの頬を掠め、傷を作って床へと転がった。鋏が目当たれば失明しかねないのだがナイトラは避けようとはしていないし、チエックはその危険性を判断出来る程の冷静さは持っていないようだった。

「どうすりゃいいんだよ！ 教えてくれよ！ 俺は！」

投げる物が尽きたチエックは崩れる表情を隠すように両腕をクロスさせるとそれで顔を覆った。それでも隠すことが出来ない口は零れ出しそうな泣き声を無理矢理押しとどめようとしているせいで酷く歪み、絶え間なく震えていた。溜め込んで溜め込んで、噴出してしまいそうな感情をそれでも吐き出させまいと必死に堪えているような印象を受ける。その印象と実際はたいして違いがなかったのかチエックは唇を震わせたままゆっくりと口を開いた。

「俺はお前が好きただけなんだよ……」

衝撃的な告白だ。ウォルは驚きの余りに周りを見渡すが喧嘩を眺めるシーナもクジユもチエックの告白に驚いた様子はなかった。クジユは驚く気力もないのかもしれないがそれにしても無反応なのは気にかかった。

「クジユ、もしかして気付いてたんですか……？」

クジユは黙り込んだまま何も言わない。否定ならどういいう形にせ

よ反応を見せるはずだ。それならばこれは肯定という判断でいいの  
だろうか。横目でシーナを見れば彼女は床にへたり込んで涙を流し  
続けていた。顔は手で覆われていて嗚咽しか聞こえないが泣いてい  
ることは間違いなかった。彼女を慰めるべきか、喧嘩を仲裁すべき  
か迷っている。喧嘩は方には変化が現れたようだった。

「どうしろって言うんだよ。離れればいいのかよ？ 離れて、どう  
なるんだよ。離れて普通にやってけ

る自信はねえ。でも迷惑なんだから、離れたいんだろ？ 言えよ。頼  
むから、そう言ってくれよ！」

血を吐くようにチエックが叫ぶ。涙声になっっているせいで叫びは  
掠れてところどころよく聞き取ることが出来ない。それでも全体の  
意味を理解するには充分だった。鼻を啜りながら嗚咽を漏らすチエ  
ックはもうなりふり構ってはいられないらしい。目を何度も服の袖  
で強く擦って涙を無理矢理拭くと腫れぼった目で真っ直ぐにナイト  
ラを睨みつけた。ナイトラはそれに動揺した様子も見せず着実にチ  
エックに歩み寄る。

チエックの発言は矛盾だらけで、冷静さを欠いていることはすぐ  
にわかる。だがナイトラは先程から一切喋らず表情を崩さないので  
何を考えているのか、冷静なのかそうでないのかは判断出来ない。  
もしもナイトラまで冷静さを欠いているというのであれば割って入  
って止めなければいけないだろう。そんな風に身構えながらナイ  
トラの行動を見逃してしまわないように観察する。ナイトラは喚く  
チエックの目の前まで歩み寄ると突然両手を大きく広げた。あまり  
にいきなりの行動にチエックが肩を震わせて驚くがナイトラは意に  
も介さない。

「もう黙れ」

ここでようやく不愉快そうにはあるが表情を歪めたナイトラはチエツクの背中へ手を回すと優しい手つきでチエツクを抱き締めた。あまりにスマートな動作に誰もが反応出来ずにいるとチエツクは驚愕の余り泣き止んだ。空気に溶け込むような震えた声はもう聞こえなくなっていた。

「……」

何か言いたいのだろうが声のせいでクジユが何も言えないでいる。そこまではわかったのだが流石に何を言いたいかまではウォルにはわからない。それが歯痒い。そんなことを考えているのがクジユの方には伝わってしまったらしく気まずそうに目を逸らされてしまった。余計に歯痒い。

チエツクを抱きこんだナイトラは目線をこちらにやると億劫そうに首を動かした。その表情はひどく面倒臭そうで、そのくせチエツクにうつされたのか泣き出しそうに瞳が細められている。

「クジユ様、ウォル様、姉さん。申し訳ないのですが客間で待っていてください。チエツクが落ち着いてから説明に向かいます」

ウォルとクジユに対してなのだろう。丁寧な言葉遣いをするナイトラはこれ以上三人に踏み込まれることを拒絶していた。しかしそんなことは知らないとはかりにクジユは部屋の中で踏み込もうとする。クジユの肩を掴んでそれを阻止すれば睨まれたが気にしない。

「ナイトラさんが出て行ってほしいって言ってるんですからその通りにしましょう。話は後でも出来るじゃないですか」

それでも止まろうとしないクジユの脇に手を差し込み、抱えるよ

うにして無理矢理引き摺っていく。まだ体調は万全ではないらしくさほど抵抗は受けなかった。それを幸いとはかりにクジユを引き摺る。シーナに客間の場所を聞いて案内してもらおう。シーナも戸惑っているようで先程までの泣き顔は引っ込んで困惑が前面に押し出されていた。

「すみません、客間はこちらになります」

「あの、シーナさん」

「はい、なんでしょう」

わずかながら抵抗を試みるクジユをなんとか押さえこんで運びながらシーナに目をやる。最初は困惑していたシーナはチェックとナイトラから離れれば離れるほど冷静さを取り戻してきているようだった。客間が近付いてくるとシーナは弱々しくウォルへ微笑んだ。

「心配してくださらなくても大丈夫ですよ。最初から私の立ち入る隙間なんてなかったんですから」

自虐ではないらしく諦めた様子のシーナはその一言でウォルの表情が悲痛に歪んでしまったことに気付いたのだろう。もう一度大丈夫ですからと繰り返してから客間のドアを開けた。金属が擦れ合う音を何気なく聞きながらまるで悲鳴みたいだなんて馬鹿げた感想を抱く。するとそれを見透かしたようにクジユが鼻で笑った。何かおかしいのかとクジユを見たがクジユはウォルから目を逸らしただけで何も語るうとはしなかった。

## 世界を終わらせる方法

客間に通されてしばらくはシーナが落ち着きなく辺りを徘徊していたが次第にそれもなくなりシーナも客間のソファーに腰をおろして二人を待つていた。彼女の心境を訊ねてみるのも手かもしれなかつたが重苦しい空気の中でそれを問うのは憚られた。クジユはクジユで自分の声で相手に不快感を与えてしまうことが嫌なのか口を開こうとしない。こういった時ばかりはクジユの体質をありがたいと感じてしまう。クジユは無神経なところがあるためよく他人の触れてほしくないであろうところに土足で踏み入るうとしてしまう。それを回避出来るのがウォルとクジユが忌み嫌っているクジユの声質のおかげというのはなんとという皮肉か。クジユにそれを言えば睨みつけられる気しかなないのでこれまでそれを口にしたことはないしこれから口にするつもりもない。

すっかり体調が回復したらしく、時折少しばかり咳き込むだけのクジユが万が一にも余計なことを言わないように密かに見張りながら二人を待つていればドアがゆっくりと開いた。金属が擦れ合う音をたてながら押し広げられたドアを掴んでいたのはナイトラだった。先程別れた時の歪んだ表情は見る影もなく凍てつくような無表情を貼りつけている。その背後にはチェックの姿もあった。

「よう。待たせて悪かったな」

明るく努めているのだろうがチェックの目の周りは泣き腫らした跡がくつきりと残っていた。まだ落ち着ききれていないのか声も若干涙声が混じっているような気もする。そう感じたのはウォルだけではないらしくクジユとシーナの眉間にも皺が寄った。

それでも王らしく毅然とした振る舞いでチェックがソファーへ腰をかけたのを一瞥してからナイトラがドアを閉じる。それからナイ

トラはソファ―に腰かけることはなくチェックの横へ立った。騎士としての定位置なのだろうか。その配置はとも日常に馴染んでいるように思えた。チェックがナイトラに腰かけるように提案するがナイトラは頑として首を縦に振ることはなかった。ナイトラの意味が揺らがないので諦めたチェックは小さく溜息を吐くところらへ向き直る。先程までの柔和な雰囲気は削ぎ落され、真剣な表情だけが剥き出しになっていた。そのギャップに動揺しているとシーナが立ち上がる。

「すみません、お茶でも淹れてきますね」

「シーナ、いい。座っててくれ」

シーナが中腰になった辺りでチェックが軽く手を挙げてそれを制す。シーナはそれでも立ち上がるうとしたがもう一度チェックが強く制せば諦めたのか腰をおろし直した。それを一瞥してからチェックは口を開く。話そうという意思が強いのか体勢は前のめりで話し始める。その距離の近さが嫌なのかクジュはわざとらしくソファ―へ深く腰かけたがチェックは気付いていないのかあえて気付かない振りをしているのかそのまま続けた。

「もうわかったとは思いますが俺がお前等をここに招いたのは国民の記憶が弄ってもらうためじゃない」

招いたというよりは拉致といった方が相応しいのだろうかそんなツッコミを入れられる雰囲気でもないので黙っておく。幸いにもクジュもツッコミを入れる気はないようだった。そのことに密かに安堵しながらチェックの話の続きに耳を傾ける。

「俺はな、ナイトラが好きなんだよ。で、幸か不幸かナイトラも俺のこと好きなんだそうだ。信じられるか？」

「王、論点をずらすな」

騎士としてのチェックを敬う態度と素の態度が交ってアンバランスになってしまった言葉でナイトトラがチェックを諷める。するとチェックは肩を竦めてから話を進めた。

「この国はとにかく批判することが好きなんだ。平和な分攻撃性の矛先が政府に向いてる感じだな。どんな小さなことでも失言があれば徹底的に批判される。そんなことの繰り返しで何度も王が変わった。俺は何人目だったかな」

「三百四十五人目ですが今はそれは関係ないので」  
「わかってるって。脱線するつもりはねえから安心しろ」

ナイトトラが諫めよりも早くチェックが先手を打つ。そのやり取りは会ってさほど時間が経過していないウォルにさえとても慣れていくように見えた。しかしチェックの話が本当だとすればひとつ、矛盾が生じてしまう。

「あの、チェックさんはシーナさんと交際しているのではなかったんですか？」

身分違いだと言っていた。大臣達はチェックとシーナの関係を断ち切るために訴えていたようだったし、刺客まで送り込まれてきたそれが嘘だと言うのなら何かメリットがあつてのことだろうがそれにしてはリスクが大きすぎる気がする。第一、王の為とはいえ恋人のふりをするなどというハイリスクノーリターンな真似をシーナがする意味がない。裏で金を積まれた可能性もなくはないがここ数日シーナと一緒にいて彼女からそういつたずる賢さが備わっているようには見えなかった。

あまり頭が良い方ではないので考えてわからなければ本人に聞く

しかない。そう考えての質問だったのだがチエックは困り果てたように眉を八の字に下げた。それをナイトラが一瞥して彼は彼でわずかに目を伏せる。その真意が読めずに首を傾げると隣のクジユが重い溜息を吐いた。世の中に存在する黒々とした感情を凝縮したような強い苛立ちを感じる溜息に驚いてクジユの方を見る。するとクジユは心底呆れたとでも言いたげな表情でウォルを見て吐き捨てた。

「カモフラージュ」

まるで何を今更そんなことを言い出すんだとでも言い出しそうなクジユはそれだけ言うのと鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまった。本当は喋らないつもりだったのにウォルがあまりに鈍感だったので思わず口を挟んでしまったのだろう。そのことに申し訳なさを覚えつつもそれが真実であるか確認するために三人を見る。

チエックはどんな顔をしていいのか決めかねているらしくウォルと目が合った瞬間に爽やかな笑みを作った。だがそれも失敗してしまつたらしく歪んで今にも泣き出しそうな表情になつてしまつている。ナイトラもやはりどんな表情になるべきか決めかねているようだ。ただチエックと違って下手に取り繕うことはせずにはわすかに不機嫌さを覗かせる無表情を貼りつけた。それからシーナ。身体を少し捻って彼女の方を見れば彼女は顔を伏せていた。太腿を強く掴む両腕は真つ直ぐに伸びている。余程の力が入っているのか太腿と一緒に掴まれているスカートは大量の皺を作り、彼女の両腕は小刻みに震えていた。手は血がうまく通っていないのか不健康そうに白く変色しているようだ。これだけ各々にあからさまな態度をとられれば鈍感なウォルにでも察することは出来た。

「……同性はな、犯罪なんだよ」

なんと言うべきかウォルが考えあぐねているとチエックがぼつり

と零す。その一言だけで全てを察することが出来るほど頭は良くないのでチエツクの次の言葉を待つことにした。

「男同士とか女同士とかの恋愛はこの国では重罪で見つかり次第処刑。あ、勿論王とかでも例外なく。あれ何番目だっけか？男好きで処刑された王」

「二百二十三日目」

もう王として接することが面倒なのかそれだけを端的に答えるとナイトラは黙り込んでしまう。なんだよつねえなあ、なんて言いながらチエツクは正面を向いた。いきなり目が合って驚く。

「だから俺はシーナと交際してることにした。シーナも俺と弟の命がかかってくるからって協力してくれた。酷いだろ？それくらいの自覚はあるさ」

チャックが自嘲気味に笑う。うまく笑みを作ろうとして今回も歪んでしまったらしく激しい違和感を伴う。明るい表情ばかり作るのに取り繕うのは苦手らしい。表情を取り繕うという点においては無表情を貫き通すナイトラの方が優秀そうだ。

ええ、酷いですねとでもクジユならば返したほうがウォルにはそんなことが言えるはずもなく、かと言って貴方は悪くないと言えるほど偽善的でもなかった。そのためやはりチエツクの次の言葉を待っている和不意に隣のシーナが意を決したように立ち上がった。顔は相変わらず下を向いていた。

「わたし、私は王とナイトラの役に立てるのなと思って自ら提案したのでから王が酷いということは決して」

「うん、ありがとうな。でも今はお客さんと話してるんだ。座ってもらえるか？」

「でも」

「何度も言わせるな。座れ」

「……」

食い下がろうとしたシーナをチェックが指差す。重低音での命令口調に気圧されたシーナは大人しくソファーへ腰をおろし直した。それを見届けてからチェックは先程の苛立った命令口調から一転して言い聞かせるように声を和らげる。

「シーナ、いいか。いくら自分で望んだからって言っても俺達はお前を利用したんだ。それは酷いことだ。わかってくれるな？」

疑問形で締めくくったくせにその言葉には有無を言わせない雰囲気が含まれていてシーナは素直に答えることはせず、目を更に深く伏せただけだった。ナイトラがそれに対して何か言おうとしたがそれをチェックが制した。それからまたウォルを見る。

「記憶を消せるのはクジユの方だったよな？」

「そうですね」

ウォルの声も特殊なのは特殊なのだが単体ではなんの役にも立たない。そんなことを今言う必要もない気がするので黙ってチェックの質問にだけ答える。するとチェックは視線をウォルからクジユへと移した。クジユはといえば視線を向けられても興味がないとばかりにそっぽを向いたままだ。

「頼みがある」

クジユは答えない。

「俺は弱い王だ。今までナイトラに依存して、シーナを犠牲にして

なんとかここまでやってきた。でも俺は王だ。いつまでも甘えてるわけにはいかねえ。俺の弱さは俺が一番知ってる。だから頼みたいことがある」

クジユがチエックを一瞥した。その間にナイトラとも目が合ってしまったようで一瞬ではあるか壮絶な睨み合いが展開される。火花が散ったように感じてしまうほど二人の互いに向けられる視線は攻撃的だった。何がそこまで二人を不仲にさせるのかはわからないが会った瞬間から反りが合わないという人間も中にはいるだろう。

「断ち切ろうと思う。だから記憶を消してほしい。最初に言えなくて悪かった。決心がつかなかったんだよ、女々しいだろ。でもいよいよ命まで狙われ始めたんだ。俺も自分を変えないと駄目だ」

クジユはやはり答えない。

ウォルとしては協力したいところだがこればかりはクジユが首を縦に振ってくれないことにはどうしようもない。まさかナイトラが気に入らないからチエックの依頼を蹴るなんて真似はしないだろうが依頼を蹴る可能性自体は多分にある。もしもそうなった場合は説得して協力してもらおう。そんなことをウォルが考えているとクジユが消え入りそうに小さい声で呟いた。

「手紙」

「は？」

意味がわからないとばかりにチエックは眉間に皺を作った。意味がわからないのはナイトラとシーナも同じようでシーナは首を傾げ、ナイトラは説明しろとばかりにクジユを睨みつけている。しかしクジユはこれ以上喋る気はないらしくナイトラを挑発するように鼻を鳴らした。クジユが説明する気は一切なさそうなので仕方なくウォ

ルが説明を開始する。説明をクジユに代わってするのはもう慣れたものだ。

「記憶を消すには手紙が必要なんです。えーと、そもそも誰のどんな記憶を消しますか？」

「俺とナイトラのお互いのことが好きだっていう気持ちだな」

それを聞いてなんとなく予想はしていたが悲しくなってしまう。環境のせいで自分のやりたいことが出来ないというのはとても辛いのだと思う。想像するしか出来ないが想像しただけでも相当の苦痛を伴う生き方だということにはわかる。彼等はきつとその生活に疲れてしまったのだろう。それならば本人が望むようにしなければいけない。幸いにもクジユは乗り気になってくれているようだし。

「まず誤解があるようなので言っておきますね。クジユは記憶を消せるわけじゃないんです。クジユが消せるのは感情です」

何度もした説明は噛むことも言い淀むこともなくすらすらと口から滑り出る。

「まず消したい感情を思い浮かべながらその感情に沿う言葉で手紙を書いてください。好きという感情の場合は好きな相手に宛てて書くのが一番いいと思います」

こんな豪華な場所なのでペンと便箋がないということはないとは思ったが念の為の懐から二人分取り出してチェックへ差し出す。別にこのペンと便箋を絶対使わなければいけないわけではないことを告げればチェックはペンと便箋を返してきた。素直にそれは受け取って懐にしまい直す。

「クジユは手紙に書いてある感情を消すことが出来ます。正確には消すわけじゃなくて塗り潰すんですけど結果は同じですから。さつきも言いましたけど手紙に書いてある感情を消してしまうので余計なことは書かないようにしてください。例えばナイトラさんのチェックさんに対する敬愛とか。そういったものまで消したくないなら手紙の内容では一切触れないでください」

淡々と説明していると蚊帳の外になってしまったシーナまでもが真剣に耳を傾けていた。そのことを少しばかり気恥ずかしく思う。

「手紙を書くだけでいいんだな？」

「ええ、後はクジユの仕事ですからお二人は手紙を書いてくださるだけでいいと思います、多分」

尻すぼみになってしまったのはウォルの判断だけで断言することは出来ないからだ。もしかするとまだ協力してもらうことになるのかもしれないしむしろその可能性の方が高いと知っている。しかしクジユは何も言わない。そもそも目を合わせてくれない。試しに名前を呼んでみてもこちらを一瞥するだけだった。そんな曖昧な説明でも一応納得はしてくれたらしくチェックは立ちあがった。

「じゃあ手紙書いてくるわ。ナイトラ、行くぞ！」

「大声で言わなくても聞こえる」

もうほぼ素で応答するナイトラは溜息を吐くと無駄に張りきって部屋を出て行くチェックからあまり離れてしまわないように早足で後を追う。その行動は王の護衛としてなのか、ナイトラ個人としての行動なのかはわからないが。

二人が出て行ったのを見送ってからクジユが大きく欠伸を漏らす。出来ればもう少し緊張感というものを持ってほしい。

「お前は消さなくてもいいのか？」

欠伸の名残がある中でクジユがそんな質問をぶつける。当然ウォルではなく、シーナへだ。いきなり呼ばれたシーナは両肩を震わせ、恐怖の張りついた瞳でクジユを見た。それもそうだろう。なんの前振りもなくクジユの声を聞いていつでも、例え表面上とは言え平然としていられるのはウォルくらいのものだ。

「何を、ですか？」

恐怖を宿しながらもシーナはそう問いを返す。それが本気なのかはぐらかそうとしているのかは定かではないが続きはウォルが引き受けることにした。クジユの聞きたいことはなんとなくわかる。

「シーナさんはチェックさんが好きですよ？ その思いは消さなくてもいいんですか？」

シーナが逃げる隙を与えないように言葉を選んでそう問えば彼女は口許を引き攣らせた。笑おうとして失敗したらしい。ここは作り笑いが下手な人が多いようだ。

「消すなって言われてるんです」

クジユの顔色を窺いながらシーナがそう言ったと同時にクジユの眉間に深い皺が何本も刻まれた。それから勢いよく立ちあがってどこかへ行こうとするのでその腕を掴んで引きとめる。非難するようには睨まれたが気付かない振りをして腕を放すことはない。クジユは何度か腕を振ってウォルの手を振り払おうと試みたが徐々にその力が強くなっていくのがわかって諦めたようだ。溜息と共に乱暴にソ

ファーに座り直す。それを見届けてからクジユの腕を掴んでいた手を放す。それからシーナへと向き直った。

「それはチエックさんにですか？」

「ええ」

「それはどうして？」

チエックの意図が読めずに酷かもしれないがシーナに続きを促す。クジユは理解したからこそ憤っているのだろうが説明してくれる気はなさそうだ。それならばシーナに聞くしかない。

「私達がここにいられるのは私と王が交際しているからなんです」

確かに不自然さを覚えたことがないわけではないわけではなかった。これだけ広い土地なのにここに住んでいるのはチエック、ナイトラ、シーナの三人だけだと言う。王様なんていうものに今まで会ったことがないのでその程度が普通かはわからないのだが三人だけで暮らすというのは明らかに違和感があった。

「ナイトラだけならまだ王の騎士ですから近くにすることは出来ると思うんです。でもそれでも騎士は一人だけではないですから今ほどずっと一緒にいられるわけではないんです。ナイトラが専属の騎士になっているのも私と王との交際があるという前提での鼻息ですから」

声が震えてしまわないように。そんなことを考えているのかシーナの声はあからさまに強張っていて不自然さを醸し出していた。本人は気付かれたくないことだと思つので指摘することはせず、更に問う。

「チエックさんはシーナさんの気持ちは知ってたんですか？」

「はつきりと聞いたことはありませんでしたけど知っていると  
思います」

「そうですね……」

それだけ聞けばチエックはとても酷い人間だと思う。先程本人も自嘲していたが彼はシーナの好意と立場を知った上でそれを利用した。更には弟であるナイトラもそれに目を瞑った。姉を少しでも裕福な環境に置きたかったのか、チエックと共に過ごす時間を手放したくなかったのか、それとももつと別の理由があるのか。何にせよ弁解の余地はないだろう。

「ひどい人達ですよね」

ウォルが絶句したのを見てシーナは大して感情の込められていない声で言う。同意を求めているわけでないらしくウォルの反応を見るよりも早く続けた。

「それでも私は二人が好きなんです。それぞれ意味は違うんですけどね。馬鹿でしょう？ 自分でもわかってるんですよ」

シーナは、どれほど辛かったのだろう。好きな人と弟が交際を始めて、それを隠すために表面的にはあるけれど好きな人と交際することになって。嬉しくないはずがない。悲しくないはずがない。いつそ嫌いになればそれだけ楽なのだろう。でも彼女はそれが出来なかった。もしかしたらしようとも思わなかったのかも。そんな彼女を叱咤してやりたい反面劳いの言葉をかけたかも知れない。どっちにするべきか。ウォルの判断が下されるよりも早くクジユが長々とした溜息を吐いた。

「これは慈善事業じゃない。金とお前のお人好しさに免じて依頼は受けてやるがな」

いつの間に料金交渉などしていたのだろうか。旅の費用はこうして依頼を受けることで作り出しているので依頼を無下にすることが出来なかったのだろう。だがクジユのことだ。不愉快だという理由だけで依頼を蹴った可能性だってある。それをしなかったのはシーナの想いを知っていたからだろう。

「クジユはどこまでわかってたんですか？」

クジユは答えない。あまり無駄なことは話したくないのだろう。それを話そうと話すまいと今後の展開には一切関係しない。

「ありがとうございます」

クジユの言葉をどう受け取ったのかシーナは深々と一礼する。それから誰かが黙り込んだ。特に話すこともないので沈黙が訪れるのは当然だろう。手紙が書き終わるまでさほど時間はかからないと思うのでこの沈黙に身を任せることにした。

「さあ、塗り潰そう」

チエックとナイトラの手紙は一時間ほどで書き上がった。

チエックの手からクジユへと渡された手紙は綺麗に封がされていて中身を見ることは出来そうになかった。その手紙の中にどれだけの気持ちが込められているのだろうか。ウォルには想像することしか出来ない。

「これからクジユがお二人の感情を塗り潰してきます。クジユ、いけそうですか？」

二通の便箋を手にして考え込んでいるクジユにそう問えばクジユは首を横に振った。厳しいようだ。それならば協力してもらわなければいけないだろう。本当は危険も伴うので協力なしに済ませたかったのだが無理なのだが仕方がない。

マイペースに歩き出したクジユの後を追う。横に並んで懐から出したガムテープを手渡した。クジユはそれを受け取ると便箋とガムテープを左手に持ち、右手でガムテープの始まりを掴むと引っ張る。三十センチほどガムテープを伸ばしたところで乱暴に手で引き千切った。そして不要になった千切っていない方のガムテープをウォルに突き返した。それから三十センチのガムテープを更に半分に千切る。その動作を人通り眺めたところでウォルは少し離れたところについてきている三人へと振り返った。その間にもクジユは歩き続けているので引き離されてしまわないように後ろ歩きをする。

「すみません。ナイトラさんに協力してもらいたんですけど大丈夫ですか？」

「協力とは具体的にはどういった内容でしょうか」

二つ返事をしないあたりナイトラは慎重だ。説明をしようとしたところでクジユが足を止める。後ろ歩きをしていたせいで止まるのが遅れて壁にぶつかった。後頭部が痛む。

クジユは頭をさするウォルに一瞥されることもなく突き当たりの部屋のドアに便箋を一つ押しつけた。その上にガムテープを貼りつけて便箋をドアへ固定する。もう一つの便箋も同じようにドアへと貼りつけた。

「これからクジユはお二人の好きという感情と戦ってきます。感情は戦って倒さないと消せないんです。でもクジユはあまり強い方じゃないというか、むしろ弱い方なんですよ」

苦笑混じりに事実を告げればクジユに睨まれた。事実なのだから仕方ないだろう。痛い視線をなんとか受け流しながら続ける。

「だからナイトラさんにも行ってきて戦ってほしいんです。チエツクさんは王様ですから、流石に頼むわけにもいきませんし」

説明といつてもこれからクジユがやるうとしていることを言葉にするのは困難だ。それならば端的に説明して協力してもらおうことにしよう。

「協力してもらえますか？」

してもらえなければクジユが無事に帰ってこられる可能性が大幅に下がるのだがそれはあえて言わないことにしよう。そういう脅しをかけるような言い方はあまり好きではない。出来るだけにこやかにそうナイトラに再度問ってみればナイトラは「わかりました」と躊躇することなく協力してくれる意思を表明した。

「それは良かった。じゃあこれをして行ってください」

ポケットを探って耳栓を取り出す。オレンジ色をしたそれはきちんと両耳につけられるように二つ用意してある。それをナイトラに渡す。ナイトラは意味がわからずに戸惑っているようだったので自分の手を耳に当ててここにはめるのだということ伝えておく。ナイトラが聞きたいのは耳栓をしなければいけない意味なのだろうがそれを説明しても理解されるのは難しいだろう。だから説明をすることはなく無言ではめることだけを指示すればナイトラは渋々ながら耳栓を両耳へ押し込んだ。そうしている間にチエックとシーナが驚きの声を上げた。

「なんだ、これ……」

「何をしたんですか……」

先程クジュが手紙を貼りつけたドアは目に痛いほどに光り輝いていた。その目の前に立つクジュはそのあまりの眩しさに目を細めているがドアから離れようとはしない。そしてこちらを一瞥すると耳栓をはめたナイトラを手招きした。ナイトラがクジュへ歩み寄るとチエックとシーナが不安そうに表情を曇らせたが何も言わない。ナイトラはチエックの頭を軽く叩いてからにやりと悪戯好きの子供のような笑みを作った。それからチエックが何か文句を言うよりも早くクジュがナイトラの手を取ってドアを開けた。

「うわっ!!」

「きゃっ!!」

「っ!!」

あまりの眩しさにその場にいた全員が目を閉じる。痛いほどの静寂には光が差し込むばかりで聴覚への情報は一切ない。眩い光は瞼

を突き刺して、目を閉じていても尚視界を明るく彩っていた。しかしそれも次第におさまっていく。目を閉じた世界が暗く戻った時、ようやく目を開けることが出来た。

「いねえ……」

ぼつりとチェックが呟く。その言葉通り、クジユとナイトラは姿を消していた。そこには便箋がガムテープによって貼りつけられたドアがあるだけで、それもきちんと閉められていた。

「ウォル様は行かれないんですか？」

シーナはてつきりウォルも同行すると思っていたらしくウォルがこちらに残っていることに疑問を投げかけた。その率直な問いに苦笑しつつもウォルは答える。

「ええ。あつちに俺が行っても足手まといにしかりませんから」

自分で言うのも情けないが事実だ。それならば待機していた方がいいだろう。シーナにはウォルも特別な人間に映っていたようで申し訳ないのだがウォルは本当に大したことは出来ないのだ。

「無事に帰ってくるように祈りましょう」

「無事に帰ってこねえわけがないだろ。俺の自慢の騎士が行ってるんだぜ」

胸を張ってそう主張するチェックの瞳はシーナに負けず劣らず不安げに揺れていた。そう自分に言い聞かせていないと不安なのだろう。それならばその言葉に乗ればチェックも少しは不安を和らげて

くれるのだろうか。

「ええ、きっと帰ってきますね」

正直なところ、今回はかなり厳しいと思うのだがこちらで不安を煽っても仕方がないだろう。ウォルに出来るのは待つことだけだ。特にするべきこともないので壁によりかかって目を閉じる。眠ってしまわないように気を付けて二人の帰還を待つことによろ。

## まるで童話のよう

「っとー！」

ふらつく足取りでなんとか着地する。どこから落ちてきたのかとあたりを見渡せば天井にドアが貼りついていて、ドアは開いたままぶらぶらとだんだん動きを小さくしながら揺らめいていた。これはここから帰るのは無理かもしれない。

「ここはどこですか」

クジユよりも先に地に足を着けていたらしいナイトラは訝しげにあたりを見回している。天井のドアについては深く考えないことにしたらしい。意外な順応性の高さだ。

「見たところ、官邸に見えるんですが」

ナイトラの指摘通り、そこは確かに官邸だった。だがそこにチェックやシーナ、ウォルはいない。全体に霞みがかかったように視界は何故か悪く、建物の一部は歪んでいたり崩れ落ちたりしている。クジユが壁を軽く叩くとそこがあっさりと崩れる。この異常な脆さではいつ崩れるかわかったものではない。

「ここは平たく言えば感情の世界だ」

「感情の世界？」

「あまり考えるな。これからこっちのお前と王を捜す。攻撃してくるから防御に徹しろ」

意味がわからず反復したナイトラにそれだけ告げるとさっさと歩

き出す。ナイトラは耳栓をしているので多少は大丈夫だろうがあまり声を聞かせ続けたくはない。だいたい、声が有害なのは他人だけではない。これまではクジユの声質を相殺するウォルがいたのでわりと平気だったが今は離れている。つまりダメージは蓄積されていくばかりだ。それならばさっさとやるべきことを終えて帰らなければいけない。ナイトラに一々説明している暇などなかった。

「一つだけ教えておいてやる。極力傷は負うな。ここでは傷を負ってもすぐに塞がる。だが、あっちに戻った途端その傷全部が戻ってくる」

「つまりこつちでは元気でも致命傷を負えばあっちに戻った途端死ぬってことですか」

「飲み込みが早くて助かる」

やはり耳栓をしてもクジユの声を聞き続けるのは辛いらしくナイトラの眉間に皺が寄る。体調不良を訴えられて使い物にならなくなると困るので早々に話を切り上げる。最も話さなければいけないことはきちんと伝えたので大丈夫だろう。

まずはこの建物のどこかにいるはずのこちらのチェックとナイトラを捜さなければいけない。とりあえず見晴らしの良さそうなところへ移動しようとしたところでクジユはびたりと足を止めた。ナイトラは一瞬それに不審げな表情を見せたがすぐに合点がいったようで小さく「ああ」と呟いた。

「……チェック？」

ナイトラが思わず呟く。ナイトラが振り返った先からは誰かの啜り泣く声が響いてきている。ナイトラが呟いたようにこの声の主はチェックだろう。チェックはチェックでもナイトラの知っているチェックではないが。

「耳栓は外すなよ」  
「わかっています」

耳栓が外れてしまわないようにもう一度奥へ押し込んだナイトラを一瞥してから泣き声のする方へ歩き出す。呼吸をすることを考えていないのか、嗚咽を吐きだすことだけしか考えていなとしか思えない泣き声は時折息が続かないのか不自然に止まる。恥も外聞もないその泣き方はいい歳をした大人のものとは思えなかった。

進む先のドアはまるで進路を阻むかのように歪んでいて開くことが出来ない。ドアを壊して進もうと蹴り飛ばしてみるのが脚力のある方ではないのでびくともしない。思わず舌打ちをすればついて来ていたナイトラがクジユを押し退け、ドアに渾身の蹴りを見舞った。するとドアはわずかながらに軋む。大して変化はないように見えたが試しにドアを押ししてみるとなんとか開くことが出来た。

「……………」

なんとなく悔しいのは口にしないことにしよう。口に出しても大して意味もないことだし。ドアを開くとチェツクの泣き声が更に大きく耳に届いた。チェツクは近いようだ。

## 二人の相性

クジユとナイトラがあちらに行つてからチエックは落ち着きをなくしていた。落ち着かないのはもしかするとすれよりも前からだったかもしれないが今とてつもなく冷静さを欠いていることは間違いない。一か所に留まり続けていることが出来ないのかぐるぐると近くを徘徊するチエックは聞き取れないくらい小さな声でぶつぶつと何を呟き続けている。もしかするとナイトラを心配する内容かもしれないしもつと別のこともかもしれない。

「チエックさん、落ち着きましよう。俺達が焦つてもどうにもならないですよ?」

チエックの異常な焦りはだんだんとシーナにまで感染し、二人揃つて落ち着きを失くし始めたので声をかけてみる。流石に二人が焦っている中で一人だけ冷静を保てるほど強くはない。自分が落ち着くためには二人に冷静でいてもらう必要があつた。勝手なのかもしれないがわかつてほしい。

「いや、無理だろ。俺はそんなに凶太くねえ」

「あの、ウォル様は本当に行かなくてよろしかったのですか?」

チエックが即答した時点でこの話はこれ以上広げることが出来なさそうだ。それを察したのかシーナが新たに問いを投げかけた。新たにというよりは再度確認するといった意味合いの方が強いが沈黙が続くよりはいいだろう。

「あつちには滅多につれて行つてもらえないんですよ。俺が行つた方が負担は減るんですけどね」

「負担」

具体的にどういった負担なのかわからないシーナはただ反芻した。興味がこちらに移ったことで気が逸れたのかチエックは足を止めてこちらを見ている。そういえばまだ説明していなかったことに今更ながら気付いて説明を開始することにした。説明したところで理解してもらえない可能性も高いが。

「クジユの声がとても有害なのは御存じですよね？ あの声は聞いた人の耳から脳に侵入して内側から

その人を侵していきます。症状は一概にこうとは言えないんですが気分が悪くなることが多いですね。重症だと意識が混濁したりもします」

そこまで説明したところでチエックとシーナの表情が曇った。そんな危険な声を持つクジユと共にあちらに行つたナイトラが心配なのだろう。正直、ウォルもそれは気にかかっている。

「俺の声はクジユとは真逆でクジユの声と相殺させることが出来るんですよ。例えばクジユが喋る。で、それを聞いた人が体調が悪くなる。でも俺の声をしばらく聞くと俺の声で浄化されて回復します。クジユの声は時間経過で効果が薄まることもあるにはあるんですけどかなりの時間が必要なので俺の声を聞くのが一番だと思います」

二人にわかりやすいように出来るだけ意識して澄んだ声を出す。透明なものを更に薄めて目視出来ないほどに純度の高い透明になつてしまっているその声はその割には存在は希薄になることはなくむしろ存在感を増しているように思う。

「ただ俺の声はクジユの声を全部浄化してしまうのであっちについ

て行くと確実に邪魔になってしまつたですよ」

二人の反応を知るよりも早くそう言つて説明を終える。あちらではクジユも騎士もかなり苦戦を強いられることになるのだらう。それがわかつていてもやはりこちら側からはどうすることも出来ない。それならばあまり余計なことを言わない方がいい。そう判断して再び黙り込めばシーナが無事を祈るように両手を合わせて目を閉じた。特にするべきこともないのでそれに倣つてウォルも両手を合わせて目を閉じる。これで二人の状況に変化があると信じられるほど楽天家ではないけれど何かが変わればいいなとは思つた。

## 塗り潰し開始

どうやらここは玉座のある部屋だったらしい。地震でも起きたのかと思ってしまうほど部屋の物は元あった位置から離れ、思い思いに転がっている。部屋の内部は壁や床が不自然に欠落していたり意図的に破壊したような跡がいくつもあった。目を閉じてこの部屋を走ると間違いなくどこかの穴に足を引っ掛けて転ぶと思う。穴達に足を絡めとられてしまわないように注意しながらナイトラと足を進めて行くとチェックは玉座の上で両足を抱える形で丸まっていた。

繊細かつ高級じみた装飾が施されている玉座と小さくなっているチェックとはひどくアンバランスな組み合わせだ。少しばかり前にはその玉座に凜とした態度で腰掛ける余裕に満ち溢れたチェックを見ただけなのだがあれは虚勢だったのではないかと思ってしまう。それくらいにその差は激しかった。こんな姿のチェックを見て動揺していなければいいのだが、という危惧のもとナイトラを一瞥する。するとクジュの危惧に反して彼は落ち着き払っていた。思えばナイトラは泣いていたチェックを落ち着かせていたし、このように弱体化しているチェックを目にするのは珍しいことではないのかもしれない。

チェックの泣き声ばかりが反響するこの空間はクジュにとっては耳障り以外の何物でもない。チェックがどれだけ血を吐くように泣いていてようと、それを見たナイトラにわずかながら躊躇の色が滲もつともクジュには関係のないことだった。

「ナイトラ、耳栓は外すな。あの男の言葉に耳を貸すな。俺を守れ」

一々その理由まで説明するのは面倒なのでそこは省いてそれだけ指示する。ナイトラは納得しきれてはいないようだったがチェックが頭を上げたところで理由を問いただしている場合でもない判断

したのか「わかりました」とだけ返した。

「……ナイトラ？」

先程別れたチェックと寸分違わぬ容姿と衣装で目の前のチェックはそう呟いた。あちらのチェックと違うのは泣き腫らした跡が強く残っているという点くらいだろう。ナイトラの前にはクジュもいたのだがチェックはクジュなど目に入らないとばかりに目に留まらせることはしなかった。それが不愉快でないわけではないが余計に喋ることも躊躇われるので黙る。

「……ナイトラ！ ナイトラだな！」

先程まで目を伏せてこの世の終わりとはばかりに泣き続けていたチェックはナイトラの姿を目に留めた途端はあつという擬音が相応しくらいに満面の笑みを作った。その表情を見てナイトラがあきらかに動揺したのがクジュからでも一目瞭然だった。いっそ得体の知れない怪物じみた敵ならば躊躇などないのだから敵がよく知った顔で、しかも想い人ということでは動揺するのは無理もないように思える。だがそれに同情する余地はない。これはチェックとクジュが望んだことに他ならないからだ。

一気に表情を明るくしたチェックは玉座の上で立ち上がると軽やかに玉座から飛び降りる。王たる威厳を見せるためのものなのか腰より少し長めまであるマントがその動きにつられてはためいた。マントがチェックの動きに完全に追いつくよりも早くチェックはこちらへ駆け出してくる。人畜無害そうな表情でにこにこ微笑んでいるあたり敵意があるとは思えないのだがどう豹変するのは予想がつかない。警戒するにこしたことはないと思うのだがナイトラの戦意はこのチェックに大幅に削られていた。その証拠に守れと言ったのにチェックが走り寄ってきてもなんの防御体勢もとらない。面倒

な依頼なのは百も承知だったが認識が甘かったかもしれない。

「ナイトラ！ 大好きだ！」

走り寄って来たチエックは床の穴に足を引っかけてたりしながらもなんとかこちらへ近寄り、ナイトラへと飛びついた。クジユは完全に無視されている。敵意を向けられるよりは楽でいいのだがどうにも釈然としない。

ナイトラはチエックに思い切り抱きつかれたにも関わらずわずかによるめき、後退しただけだった。どうやらチエックがこうして抱きついてくることを予想していたらしい。そのことに感心しつつも二人の様子を眺める。チエックはひたすらに愛の言葉を口にしながらナイトラに抱きつき続けている。ナイトラはといえば戸惑いを隠せないように酸素を求める金魚のように口をしきりにぱくぱくと開閉させていた。その両手はチエックへ回すことも出来ず、中途半端な位置をさ迷っている。このまま様子を見ているばかりでは事態は悪化しそうな気しかしない。現状を打破する方法をクジユは一つしか持ち合わせていないのだが、一つも持ち合わせていないよりはマシだと思う。

「騙されるな、惑わされるな。何度言わせるつもりだ」

何度も言った。苛立ち混じりにそうもう一度だけ言えばナイトラよりも早くチエックが反応を見せた。好き好きアピールは急に止みその顔から笑顔が消える。ナイトラからその様子が見えないのは残念だ。見えていたならきつとこのチエックが本物とは似ても似つかない、凍てつくような無表情を浮かべる偽物だとわかったことと思う。

「頭、痛え」

ぼつりと呟かれた苦痛を伴うその声は独り言か、ナイトラに向けているのか。それが判断出来るよりも早くチエックはナイトラから離れるとクジユを睨みつけた。子供に睨まれたと錯覚してしまふほど幼稚で純粋な敵意に思わず苦笑してしまいそうになるがチエックの怒りを煽りそうだったのでやめておいた。やはり頭が痛むのかチエックは両手で頭を押さえながら唸った。

「なんでみんなして俺の邪魔するんだよ……」

チエックの言葉を見做す。まともに対応しても大したことがないのは明白だった。するとチエックは抗議を続ける。頭痛がするのにも構わず頭から手を離すと両手を広げながら訴えた。表情は苦悶に歪んでいる。

「俺はナイトラが好きなんだよ。どうしようもないくらい好きなんだ。好きでい続ける為なら何を犠牲にしたっていい。俺にはナイトラが必要なんだ。それなのにどうして邪魔するんだよ！」

利己的な言い分はきつとチエックの本音なのだろう。こういった人間の本性はどれだけ取り繕うともこちらではあっさり表面化してしまう。流石にこの言い分を聞き流すことは出来なかったのかナイトラが窘めるようにチエックの名を呼ぶ。するとチエックはぐりんともの凄い勢いでナイトラの方へと身体を回転させた。その瞳には涙が溜まり始めていてナイトラがまた動揺したのがわかった。

「何がいけねえの？俺はお前が好きなんだよ。この想いに誰も首を突っ込まないなら俺はどんな誹謗中傷だって受けてやる。国民の批判的になってもいい。それなのにどうして邪魔すんだよ！なあ、ナイトラ！」

ナイトラは答えない。ナイトラがチェックに肩入れを始める前にさっさと仕事を開始するべきだろう。ナイトアが何か言うよりも早くクジユは口を開いた。

「お前の邪魔をしているのは他の誰でもないお前自身だ。お前がいると邪魔だ、大人しく消えろ」

どれだけ言い回しに気をつけてもそれが真実だ。チェック本人が『好き』はいらないと言った。消してほしいと言った。それならこの『好き』の塊であるチェックは消えるべきだ。

そうして宣戦布告の真似事してみるとチェックは瞳に溜めていた涙を溢れさせた。緩慢に目尻から頬へ伝うそれをチェックが拭うことはない。その代わりに身を翻して玉座の後ろへ身を隠した。

「おい、来るぞ。武器を構えろ。チェックと戦え、俺を守れ」

「……わかっています」

先程までチェックに翻弄されっぱなしだったたくせに少し距離を置いただけでかなり冷静さを取り戻したらしい。あまり気乗りはしていないようだ。だが剣を鞘から引き抜いたナイトラはそれを構える。それとチェックが玉座の後ろから姿を現したのはほぼ同時だった。

「邪魔なのはお前だよ。お前が消えれば万事解決だよなあ？」

玉座の後ろに隠していたのか刀身が平均よりも長い剣を手にしたチェックは一気にクジユに向かって駆け出す。クジユは一步も動かない。代わりにナイトラがクジユの前へと立ち塞がるとチェックの一撃を剣で易々と防御してみた。なんで邪魔するんだよ、とかナイトラへの非難が飛んだが取り合わない。

「あっちのお前のために俺を守ってる奴をあまり責めてやるな」

この際、喋る内容はなんでもいい。とにかく喋ってこの声をチエックに聞かせる必要があった。黒々とした粘着質なこの声は確実にチエックを蝕み始めている。やめると叫び声が出たが無視した。チエックは無理矢理黙らせようとチエックを狙う。しかしその攻撃は全てナイトラによって防がれてしまう。チエックは苛立ちをあらわにする。

「お前！ 黙れよ！ 痛いんだよ！」

子どもじみた言い方で叫ぶチエックの身体を黒が這う。墨汁のような黒はチエックをそのまま包み込むかのように足元からチエックを覆い始めていた。チエックはそれを払い落そうと叩くが黒はそんなことはお構いなしに侵食を進める。黒は螺旋を描くようにチエックの足元から太腿辺りまでを覆う。

「痛いのが嫌なら大人しくしている。そうすれば最低限の痛みで済む」

「ふざけるな！」

もはや余裕に溢れたチエックの姿はどこにもない。この調子ならばチエックの『好き』を消すのにはさほど時間はかからないだろう。とにかくチエックに語りかけて侵食を進めながらそんなことを思う。しかしこんなに順調に物事が進むはずもなかった。

「……ナイトラ。……ナイトラ！」

急に攻撃を止めたチエックは天井を見上げると涙で満たされた瞳でナイトラを呼んだ。これはこの場にいるナイトラのことを呼んでいるのではないのだろう。警戒し、チエックを凝視しているナイト

ラの首根っこを掴んで後退する。

「なん……ですか!」

「来るぞ」

「は?」

耳栓をしているとはいえ、クジュの声を聞きすぎている。ナイトラは顔面蒼白で体調が悪いのは一目瞭然だった。しかし現段階では我慢してもらうしかないのでそこに突っ込むことはしない。自分の声のせいで苦しんでいるかと思うと申し訳ないが仕方のないことだ。

「ナイトラナイトラナイトラナイトらナイとらナイとらナイとらナイとら」

壊れたように何度も呼ぶチェックに狂気を感じて寒気を覚える。

あれほどまでに熱烈に名を呼ばれてナイトラはどんな気持ちなのだろうか。下世話な好奇心なので口にすることはしない。苦虫を噛み潰したような表情から察するに嬉しくはないのだろう。まあ、当然か。いくら好きな相手であってもあれは怖い。

いつまでチェックは呼び続けるのだろうか。ナイトラのためにもさっさと消して帰りたい。ナイトラだけではなくクジュ自身も声に多少なりともダメージは受けているのだが耐性がある分まだナイトラよりはマシなのではないだろうか。時折襲い来る軽い吐き気には気付いていないことにする。

不意に不穏な音がした。あえて形容するなら緊迫した空気に亀裂が入った時の音。間もなくしてそこまで離れた形容ではなかったことに気付いた。実際に天井には亀裂が入っていた。指の骨を鳴らす時の音を酷く大きくしたような音が断続的に響き、天井の亀裂は大きくなっていく。

「ないとら……」

そう呟いて恍惚とした笑みをチエックが浮かべたと同時に天井が崩壊した。天井だった瓦礫が落下してくる。それを避けるためにクジユとナイトラは入口あたりまで後退した。瓦礫が床へいくつも衝突したことで砂埃が舞い、一時的にはあるがチエックの姿は見えなくなってしまうていた。視界が悪い以上、砂埃が落ち着くのを待つしかない。もう少し遅れてくればいいものを、と舌打ちしたくなる気持ちを抑えながら近くに転がる高級そうな花瓶を手に取った。こんなものでも丸腰よりはマシだ。

「二手に分かれる。お前はお前の相手をしろ」

「は？」

ナイトラの顔には意味がわからないと書いてあるが無視する。説明している時間はないし、説明しなくてもどうせすぐにわかることだからだ。花瓶を構えて砂埃がおさまるのを待つ。何か武器になりそうな物くらい持つてくれば良かったと今更ながらに後悔した。砂埃はしばらく視界を邪魔していたが徐々に落ち着き、視界も回復してくる。霧がかかった程度の視界になったところでクジユは横にずれる。ナイトラは不審に感じていることを隠しもせずにクジユを見た。手を振って前を見ていろと指示する。意味がわからないながらもナイトラがそれに従ったところであちらに変化が起きた。

誰かが一步踏み込んだ。砂埃が床にいくつも落ちているのでそれを踏みつけ、砂利を擦るような音が大きく聞こえる。それを聞いてクジユは更にナイトラから距離を取った。すると突如霧のような砂埃を何かが突き抜けてきた。それが何か予測の出来ていたクジユは一瞥することもなく駆け出す。クジユの標的はチエックだ。どこにいるのかはよく見えないが声がするのでなんとなくの位置はわかる。

「なっ………!？」

焦って上擦った声をあげたナイトラを無視した。あちらはあちらでうまくやるだろう。それは投げやりでもあるし、信用しているからでもある。ナイトラを気にかけるのはやめて自分のやるべきことに集中することにした。まだわずかに舞い続けている砂埃に紛れてチエックに静かに、しかし素早く走り寄る。チエックがはつきりと目に入る位置まで接近したところでようやくチエックがこちらに気付いた。チエックが何かしらのリアクションを取る前に花瓶を振り上げて頭上めがけて思い切り振り下ろす。チャックは驚愕に目を見開いたが防御することは叶わず、鈍い音を響かせて花瓶と衝突した。その衝撃に耐えきれずチエックは膝を折り、頭から崩れ落ちる。その胸倉を掴んでこちらに向かせた。

「はなせ」

純度の高そうな殺意の籠った目でチエックがクジユを睨みつける。だがクジユは動じない。これくらいで動じるわけにはいかない。

「断る。消える」

「いやだ」

先程の一撃が余程効いたのかチエックの抵抗はない。これ幸いとはばかりにチエックの耳元に口を寄せると囁き続けた。

「やめろ」

「お前は嫌気が差しているんだろう？ ナイトラを苦しめることしか出来ない自分に。愛しているのに何もしてやれない。返せるとすれば、地位くらいか？」

「いやだ」

拒絶を繰り返すチエックは力を振り絞って両手を振る。それはクジユの顔をわずかに引つ掻いただけだった。なめらかな線を描いた傷は十秒もしないうちに塞がる。傷を作ってしまったことに舌打ちしながら囁くことはやめない。

「だからお前は思った。それならリセットしてしまえばいい」

「ちがう」

「何がだ？ その証拠に俺がここにいる。お前がこうして形を持つてる。お前は俺に塗り潰されるために具現化された。現実から逃げるな」

じわじわとチエックを蝕んでいく黒は既に胸あたりまで侵食していた。胸を覆い始める黒は首と両腕へ分散しながらも確実にチエックを侵す。チエックの瞳には明確な恐怖が宿る。あともう少し。追い打ちをかけようと息を吸い込んだところで息が詰まった。中途半端に吸い込んだ息が逆流しておかしな声が出る。左脇腹に熱した金属を押しつけられたような痛みを覚えながら熱のこもった息を吐き出す。その場に今すぐにも倒れ伏したい軟弱な精神を叱咤しながら機械人形じみた動きで首を回して背後を確認した。

「くそっ……」

左脇には見慣れた剣が突き刺さっていた。それはナイトラの剣に違いなく、しかしナイトラは剣を手にしていた。それならばこの剣は何だろう。答えは簡単だ。この剣もナイトラの物だ。ナイトラは、背後に二人いた。

「どけよ。守るのは俺の役目なんだよ。役目だけじゃない。俺はチエックが好きだ！ 好きだから守ってる。何が悪い！」

完全にキャラが変わっていると云わざるを得ない。二人のうち一人のナイトラは丸腰で、ナイトラに攻撃されないように攻撃可能範囲外にまで後退している。どうやらナイトラはナイトラと戦いながら剣をクジユに投げ、見事命中させたいらしい。技術の為せる技か、愛の為せる技か、はたまたただの偶然か。

「だからどけよ！ お前は俺だろ！ 理解しろ！」

ナイトラは訴えるがナイトラは答えない。背中を向けているのでどんな表情をしているかはわからなかった。脳を侵しそうな激痛に何とか耐えて立ち続けているとナイトラが丸腰のナイトラに歩み寄った。

「早くしてください」

感情のこもらない声でそう言ったナイトラはナイトラに斬りかかるが避けられる。言われなくてもわかっている。そう言おうとしたがそんな元気もないので大人しくチェックに囁きかけた。

「きえたくない」

「……さようなら、だ。次に生まれた時は存在することを許してもらえればいいな」

「いやだ」

同じ台詞しか繰り返さないチェックの身体を這う黒はあつという間にチェックの残りの覗いていた身体を覆い尽くした。それを確認してからチェックを掴んでいた手を離す。ナイトラの叫び声がうるさい。床に崩れ落ちたチェックは一度少し跳ねるとまるで消し炭のように散り散りになって空気へ溶け込んでいった。その様子を眺めながら左脇に突き刺さった剣に手をかける。この空間では傷は自動

的に回復するが剣が突き刺さったままでは回復が出来ないようだった。わずかに引き抜くと激痛が走り、皮膚が粟立つ。

「……一人目完了」

熱っぽく吐いた息はきつと誰にも届かなかっただろう。改めてチェックを一瞥するとチェックはもう消え去っていた。

そうしてこちらも

やはり落ち着くことが出来ないのかチエックはあたりを歩き回っていた。シーナは未だに祈り続けているがウォルにはそれを続けることは出来そうにもなかった。どう時間を潰そうかと考えながらとりあえず立ち上がる。そろそろ時間もかもしれない。目を閉じて祈り続けているシーナの邪魔になってしまわないように出来るだけ音を立てずに移動する。落ち着きなく徘徊するチエックを呼び止める。

「チエックさん」

「あ？」

嗜好に没頭していたのかウォルが声をかけた途端跳ね付けられたように顔をあげた。その顔色はあまり良くなさそうだ。

「大丈夫ですか？」

「何が？ 俺すげえ元気だぜ」

チエックの体調がすぐれないように見えるのは単に心配をしすぎるあまりのことなのかもしれない。これまで一体どれほどナイトラに依存していたのだろう。そしてそれを自らの手で手放そうとしているチエックはどんな想いなのだろう。聞きたくないわけではなかったが他人の心に土足で踏み込むような真似に思えてそれは躊躇われた。そうしている間にチエックが口許を押さえた。逆流する胃液を押しとどめようとしているようなその動作にウォルが目を細める。チエックは嗚咽するように何度か咳を繰り返すと二、三步よたよたと歩いた。今にも意識を手放しそうなその危うさを傍観していることも出来ず手を貸す。チエックの異常に気付いたのはシーナはいつの間にか祈るのをやめてこちらを見ていた。そして腰を上げてチエ

ツクへと歩み寄る。ウォルの肩を掴んで支えにしながらチエツクは咳き込む。

「な……だ、これ。げほっ」

「多分、あつちでチャツクさんの『好き』が消されようとしてるんです。大丈夫ですよ。次に目を覚ました時には『好き』は消えていきますから」

「……………ああ、そう」

たつぷりとした沈黙があつてから興味なさげにチエツクがそう返す。そうしたところで限界点を越えたのか、安心したのか。目を閉じてその場に崩れ落ちようとしたチエツクを咄嗟に抱きこむようにして支える。とりあえず支えられたことに安堵した。

「どうして王は泣かれていますか？」

心配そうに覗き込んだシーナがそう問う。その言葉通りチエツクは泣いていた。嗚咽もなく涙だけを静かに流しているその様子は不自然で作り物じみている。意識を手放した途端の涙にシーナが驚くのは無理もなかった。しかしウォルにとっては初めての経験でもないので特別慌てる必要はない。

「『好き』が消えて悲しいんですよ。チエツクはもう覚えてないでしょうけど、急に心に空白が出来た心が泣いてるんです」

「……………もう『好き』を取り戻すことは出来ないんですか？」

「出来ないことはないですけど、クジユが許してくれないと思えますよ。苦勞して消してやったのにその言い草はなんだ、って」

「そう、ですね。すみません」

目を伏せたシーナに対してあまり気にしないように声をかけてか

らチェックをソファアまで運ぶ。チェックは意外に重さがあり、半ば引き摺るような形になってしまふ。それでもなんとかチェックをソファアに寝かせることが出来た。カ一杯ソファアに投げつけるという乱暴な方法ではあつたが。

「私、タオル持つてきますね。汗をかいておられるようですし」

そう言われてチェックを見ればしつとりと汗をかいていてまるで風邪をひいているようだった。そのくせ呼吸は至つて穏やかなのだから不自然さを覚えてしまふ。

「それがいいかもしれないですね」

その言葉を聞いてからシーナがタオルを取りに駆けていく。それを見送つてから汗ばんだチェックの髪を何度か梳く。

「まずは一人目」

チェックは無事だろうか。怪我をしていないといいと心から思つ。残るはあと一人だ。

「じつして恋慕は塗り潰される」

「っ、うっ！……は」

皮膚が粟立つて冷や汗がだらだらと流れる。少しでも気を緩めれば剣を引き抜く力は萎えてしまう。その度に深呼吸を繰り返し、決意を固めてからもう一度剣に力を込めて引き抜き始める。そしてまた鳥肌と冷や汗。手が痛みにも萎える。そんなことを何度か繰り返してなんとか剣を完全に引き抜いた。

「は……」

その場に尻餅をついて荒く呼吸をする。障害物がなくなつた途端に傷は塞がり始め、クジユが息を整え終わった頃には完全に塞がっていた。痛みはもうない。だがここから出ればあの痛みが戻ってくる。それを思うと気が滅入った。先程剣を抜くという作業でかなり体力を消耗してしまつたようでも立ち上がる気にもなれない。引き抜いた剣を足元へ転がす。クジユ出身の血液が大量に付着して不快なアンティークと化していた。そこでようやくクジユは戦いを続けているナイトラ達へ目をやる余裕がなんとか出来る。既に介入する気力はないので決着がつくまで待機していようと思う。

「どうして消した！ チェックを返せ！」  
「……」

吠えるナイトラと沈黙するナイトラ。沈黙している方が本物だろう。偽物はクジユに剣を投げつけたせいで丸腰となり、苦戦しているようだった。こちらとしては有利なのでなんの問題もない。

偽物はナイトラの剣が届かない程度に距離をとっている。ナイト

ラがその距離を容赦なく詰める。そしてそれを更に偽物が後退して距離を取る。これでは決着がつきそうもない。

「仕方ない」

リスクが高いが早く帰りた。さつさと決着をつけてもらうにはこの方法が一番だろう。

足元に転がしていた剣を手にとって立ち上がる。それだけでも疲弊しきった身体は動くのを拒否し、ひどく重たかった。それを極力無視して剣を構える。別に戦うわけではない。投げるだけだ。右手に剣を握り、手を後ろへ傾ける。それから重心を後ろから前へ移動させながら腕を振って剣を手放した。剣は多少歪な放射線を描きながら二人に向かう。声をかけずに行動したので二人はかなり驚いているようだったが気にしない。持ち前の反射神経を駆使して突如飛んできた剣を回避した二人は同時にこちらを見る。剣は浅く壁へ突き刺さった。この程度で壁に突き刺さってしまうとはこの壁は結構柔らかいのもしれない。

「さつさと決着をつける」

疲れているんだ、早く帰りたい。面倒臭いという感情を凝縮させてそれだけ伝えるとクジユはもう一度腰をおろす。もう立ち上がる気がしない。一方クジユの言葉の意味を理解した偽物は素早く壁から剣を引き抜くとナイトラから距離を取った。付着した血を飛ばすように剣を振るがあまり変化はない。

「なんのつもりですか」

まだ理解しきれないナイトラがクジユへ問う。口を開くことさえ億劫なのだがそう訴えるのも面倒だったのでその問いに答える。

「戦って倒せ。弱っていれば俺の声に対する耐性も弱まる」

万全の状態の奴に声を聞かせ続けるより、衰弱した奴に少し声を聞かせてやる方が効率がいい。なによりもクジユ自身が延々と声を聞かせ続けられるような体調ではない。ここは傷は回復するが疲労は回復してくれない。こんな体調で自分の声を聞き続けければ偽物よりも早くダウンするだろう。そう判断しての行動だったのだが果たして今の説明でナイトラに正しく伝わっただろうか。伝わらなかつたとしてもナイトラには戦ってもらわなければいけないのだが。

武器を取り戻して勢いまでも取り戻した偽物は一步大きく踏み込むとナイトラへ剣を振り下ろす。外見に反した荒々しい戦い方を意外に思う。ナイトラは剣を盾にそれを受ける。それから剣に力を込めて偽物を押し返した。押し返されて舌打ち混じりに後退した偽物はまた距離を取って体勢を立て直す。随分と慎重な戦い方をする。それに苛立ちを覚えているらしいナイトラは眉間に皺を寄せた。ナイトラも早々に決着をつけてしまいたいのだろう。クジユの声にナイトラも少なからずやられているはずだから早く戻ってウォルに浄化してもらおう必があった。纏わりつく倦怠感が不快で仕方がない。

「本当は気付いてるだろ」

クジユの時ともチェックの時とも違い、遠慮のない面倒臭そうな声でナイトラが言う。自分に対しての配慮は一切ないようだ。

「何に」

「お前はチェックを守ってなんかない」

「黙れ」

間髪入れず、偽物が低く唸った。精神的に揺さぶりをかけていく

作戦のようだ。それに偽物が乗るかは怪しかったがこの様子なら乗ってくれそうだ。自嘲気味な笑みを浮かべてナイトラは続けた。

「愛してる？ 好きだから守る？ 笑えるな。俺達はいつだってチエックを守れてなんかない」

「黙れ黙れ黙れ！」

黙れというわりには偽物は動かない。実力行使で黙らせるという選択肢はないらしい。剣を握る手が震え眉は吊り上がっている。なおもナイトラは続けた。

「俺達はいつだってチエックの枷になってた。姉さんも苦しめてた。否定出来るか？ 出来ないだろ」

精神攻撃は偽物に相当聞いているようだった。素人なクジュから見てもわかりやすいほどに偽物には数多の隙が生まれている。それでもナイトラはまだ攻撃を仕掛けようとしない。何か考えがあるのかもしれないので口は挟まず黙って傍観することにした。

「俺達はチエックの首を絞めてる。何が騎士だ。チエックに守られてるだろ」

「ちが……」

「違うない。結局俺達はチエックを甘やかすふりをしてチエックに甘えてたんだ」

俺達、と表現しているのは偽物とナイトラ自身を同時に批判しているのだろう。批判しながらも自己否定をされていて、大丈夫なのかと思わないでもない。

「そんなこと……」

震える声でもなにお否定しようと偽物が口を開いた。この時点で偽物は大部分の戦意をナイトラによって削り取られているようだった。そんな偽物を見て目を細めてナイトラは偽物に気付かれないうちに剣を強く握り直した。それから躊躇いなく踏み込むと一気に偽物の間合いへ侵入する。偽物は完全に侵入されてから応戦の体勢を整えようとしたがそれは遅すぎた。ナイトラは構えた剣を垂直に突き出して偽物の胸を貫いた。偽物の手から剣が落ちる。

「が、はっ………！」

胸を貫かれた偽物はナイトラの肩口に吐血する。感情が具現化しただけの存在なのに血を吐くというのはおかしい気もするがそうなっているのだからいくら考えても仕方のないことだ。偽物はひどく緩慢な動作で手をナイトラの肩へと置いた。先程吐いた血にその手が触れて掌が赤く染まる。だが偽物はそんなことには構わなかった。ナイトラもたいして問題だとは思っていないのか沈黙を貫いている。

「俺は………」

偽物が口を開く。ナイトラは黙って聞いている。

そういえばここで傷が塞がるのはクジユ達だけなのだろうか。偽物の傷が塞がる様子はない。どうしてクジユ達だけ傷が塞がるのかはわからない。この世界の専門家になりたいわけでもないので深く考えようとも思わない。

「おれはただ、まもりたかつただけなのに………」

そう弱々しく呟いた偽物は泣いているようにも思えた。こんなことがあるからいつだって『好き』を相手にするのは嫌いだ。それで

も依頼主が望むなら旅を続けるためにもやらなければいけない。そんなことを考えているとナイトラが意味ありげな視線を寄こしてきた。それを受けて立ち上がることなく口を開いた。あの様子なら少し声を聞かせるだけで充分だろう。

「お前はいなくなつてほしいと望まれた。だから消える」

それだけ言つた途端に足元から偽物の身体が黒に蝕まれていく。弱っているので少し声を聞いただけでも黒は止まることなく偽物を覆う。ナイトラはそんな偽物を見ながら先程の呟きに対して答えた。

「これからは本当に騎士としてチェックを守るから安心しろ」

偽物に言つたのか、それとも自身に対して言つたのか。それを聞いた時には偽物はほぼ黒に覆い隠されていた。それでもナイトラはその言葉に応えるように偽物は右手を軽く挙げて弱々しく振った。そしてそれが合図だつたかのように真つ黒になったナイトラの偽物はぼろぼろと崩れていく。崩れた破片達はナイトラに振りかかるがすぐに雪のように溶けてしまう。さながら黒い雪に降られているようなナイトラをクジユはただ眺めることしか出来ないでいた。

「泣いてるのか」

問うべきか迷つた拳句結局問う。先程まで偽物を貫いていた剣は力なくその先端を床につけていた。ナイトラは涙を流しながら鼻も詰まって来たのかずると音を響かせて鼻を齧つた。それからクジユを見る。その表情は穏やかな無表情で戸惑う。

「チェックが泣き虫なのは知ってますよね？」

「ああ」

「普段虚勢張って余裕綽綽みたいな顔してるくせに俺や姉さんの前ではわんわん泣くんですよ。だからかもしれないですけど俺にはいつの間にか泣かない習慣がついてたんです」

そう言うナイトラは泣いている。発言と矛盾しているではないか。そんなことを指摘しようとしてやめた。チェックがないからそのナイトラは泣いているのかもしれない。労いの言葉をかけるべきなのかもしれない。だが気の効いた台詞も思い浮かばない上に声をかけてもいい雰囲気でもなさそうなのでやはり黙っておく。

「チェック、ごめん。愛してる、愛してた……」

過去形で締めくくったナイトラはまだ好きという気持ちを忘れていないのだろう。だがここから出れば失われてしまう。それは確実な確定事項だった。嗚咽を漏らすナイトラを一瞥してからクジユはのろのろと立ち上がる。それから近くの壁を渾身の力で蹴る。苛々していたからだとかそんな理由ではない。壁はクジユが蹴りを入れたところを中心に直径三十センチほどの歪な穴を作り出した。その穴の端をまた蹴って更に穴を広げていく。足の届かない上の方は偽物の持っていた剣を使って壊していくことにする。一人がようやく通れるほどの穴を作ったところでクジユは未だに泣き続けている。ナイトラを見た。クジユの作った穴の先は真つ暗で今にも吸い込まれてしまいそうだった。

「帰るぞ」

泣きすぎて呼吸がうまく出来ないナイトラは何度か咳込む。涙で濡れたその手を掴んで引いた。ナイトラは抵抗せずに引かれるままにクジユについて来る。クジユは穴の前まで来るとそこで手を離す。ここから帰れることを伝えるとナイトラの背後に回って蹴り落とし

た。

「いつ!?!」

「だいたい奴は怯んで落ちない。だから俺が落としてやる、ありがたく思え」

泣くことに集中していたナイトラがこの突然の攻撃を回避出来るはずもなくバランスを崩して穴へと落ちる。それを見届けてから振り返ってこの場所を目に焼き付ける。

「……さようなら、だ」

クジユによって塗り潰された二人はどうしているのだろうか。考えても仕方ないが。そもそももう存在していないのかもしれない。そんなことを無意味に考えながらクジユは背中から穴へと落ちていった。

## また戻る

「チエックさんの『好き』は消したみたいですからもうすぐ帰ってくると思いますよ」

タオルを持つてきて、チエックの汗を拭うシーナを安心させるようにそう言う。その予想は本心から言ったものなので気休めというわけではない。シーナはチエックの世話に集中しているのかウォルに目をやることなく汗を拭い続けていた。

「弟の『好き』は消されてしまったんですか？」

「さあ、どうでしょう？ でももうすぐ消されてしまうことは間違いないと思います」

「そうですか」

そう呟いたシーナは残念そうだった。本当ならばシーナにとって二人の『好き』が消えてしまうのは好都合なのではないかと思う。だがシーナの様子を見る限りではそんなことはないようだった。母親のように優しい手つきでチエックの汗を彼女は拭い続ける。そんな彼女をしばらく眺めてからウォルは立ち上がった。かたまってしまった身体を背伸びをすることで慣らす。そんなウォルを見て何かがあると判断したのかシーナが声をかける。

「ウォル様、どうかされましたか？」

「いえ、そろそろかと思って」

何が、とは言わない。勘でしかないので無暗に発言するべきではないだろう。ただの直感だ。だがもうそろそろクジユが帰ってくるような気がした。その瞬間を見逃すまいと二枚の便箋がガムテープ

で乱雑に貼りつけられたドアを凝視する。じわりと、視界がぼやけた。

便箋を中心にあたたかな光がドアを包んでいく。シーナが驚きに小さな声をあげる。ウォルは発光しているドアへ歩み寄るとノブに手をかけた。それから迷いなく開ける。奥の部屋に繋がっているはずのドアの向こうは真っ黒で何も見えない。

「どういうことですか？」

「さあ、どういうことでしょう？」

驚くシーナの言葉をほぼそのまま返す。いきなりドアが光った理由？ それともドアの先が真っ暗な理由？ どちらにせよウォルはその問いに対する答えを持ってはいない。持とうと思ったこともない。重要なのは知っているということだけだ。シーナへ目をやる余裕もなくドアの向こうの暗闇に手を突っ込む。暗闇は深く、腕は見えなくなる。それでも構わず更に奥へ腕を突っ込む。手先を絶え間なく動かして掴むべきものを探す。目一杯腕を差しこんで必死に探す。そうしていると指先を目当てのものが掠めた。無我夢中でそれを掴んでこちらへ引っ張る。かなりの重量のあるそれは片手で引っ張るには重すぎてもう片方の手も使い、踏ん張って引き摺り出した。

「んん……のこー！」

暗闇からウォルによって引き摺りだされたのはクジュとナイトラだった。ナイトラは意識がないのかぐったりとしていてクジュはそのナイトラに肩を貸すことでナイトラを支えていた。クジュの方には意識はあるようだがかなり疲弊しているのか息が荒い。戻つて来たクジュはまずナイトラを手放すとウォルへ寄りかかった。頬には浅く切り傷があり、左脇からは絶え間なく鮮血が流れ出ている。その赤さに比例するようにクジュの顔は蒼白になっていく。

「シーナさん、救急箱持ってきてもらっていいですか？ ナイトラさんは気絶してるだけなのでベッドにでも運んであげてください」

徐々に脱力していくクジユを支えながらそう頼めばシーナは弾かれたように部屋を飛び出した。どうやら急いで救急箱を取りに行ってくれたらしい。これほどまでに広い上に王が住んでいるのだから住み込みの医者くらいいてもよさそうなもののだが。無傷を信じてなんの用意もしてなかったことが裏目に出ってしまった。

「ナイトラさんは無傷なのにクジユが重傷って一体どういうことなんでしょうか」

「うるさい」

答える元気はあるらしい。それはなによりだ。

クジユの出血は止まる様子がなくこのままではいよいよ危なそうだ。しかしクジユを支えたままでは動くに動けない。シーナが早く帰ってきてくれることを祈りながら止血出来そうなものはないかと視線を巡らせるがそれらしいものはなかった。自分の着ている服は既にクジユの血でかなり汚れてしまっているのだが構わないのだからうか。こんなことなら応急処置くらい出来るようになっておくべきだったかと後悔し始めたところでクジユが弱々しく右手を挙げた。それからそれを何度か左右に振る。その行動の意図が掴めず首を傾げるとクジユが口を開いた。

「……ただいま」

今にも死にそうなのに余裕だな、とかあまり動かない方がいいんじゃないかなとか色々言いたいことはあったけれどウォルはそれを飲み込んで笑みを貼りつけた。

「ああ、おかえりなさい」

## それから彼等は

あれから十分ほどでナイトラは目を覚ました。

クジユはシーナに応急処置をしてもらい、意識が戻るのを待っている状態だ。戻ってきた時には意識はあつたのだが出血が多すぎたため意識が保てなくなったようだった。二人が帰還した少し後に目を覚ましたチエックが医者を呼んでくれているらしい。ありがたいことだと思う。

「おはようございます」

目を覚ましたナイトラに笑顔でそう挨拶をすると怪訝な顔をされた。そんなにおかしな発言をしたらどうか。ベッドで上半身を起こしたナイトラは辺りを見回してからようやく戻ってきたことに気付いたようだった。

「王と姉は……？」

「チエックさんはお仕事はどうしても忙しくて抜けられないそうです。シーナさんはクジユの看病をしてくれています」

本来ならばウォルがやるべき仕事なのかもしれないが生憎そういつた作業には向いていない。それに快く引き受けてくれたのでこれを無理に断るのも躊躇われた。そのためチエックの世話はシーナに任せている。その代わりと言ってはなんだがこうしてナイトラが目を覚ますのを待っていた。

「ナイトラさん、体調はどうですか？ 寝ている間に俺が勝手に語りかけて浄化してたんで気分が悪かったりとかはしないと思うんですが」

眠るナイトラにひたすらに話しかける時の虚しさと言ったら言葉では形容しがたいものだったのだがそれはナイトラにいくら言っても無駄だろう。とりあえずシーナにでも目を覚ましたことを伝えるべきだろうか。そう思い立ち上がるうとしたところでナイトラに呼びとめられた。ナイトラの手にはウォルが渡した耳栓が乗せられている。

「返します。助かりました」

「いえいえ、こちらこそクジユを守ってくださってありがとうございますございました」

ナイトラから耳栓を受け取りながら心からの礼を口にする。クジユが重傷で帰ってきたわけだがナイトラが守ってくれた結果あの程度で済んだのだろう。もしもクジユがウォルの立場だったなら職務怠慢かと責め立てるのだろうがウォルはそうはしない。人を信じることは大切だと思う。だから感謝以外の感情などなかったのだがどうやらナイトラには皮肉を受け取られてしまったらしかった。ナイトラの眉間に深い皺が刻まれ、合わせる顔がないとばかりに目を逸らされる。ここで下手にフォローすれば逆効果になる気がしない。さて、どうしたものか。

「すみません。クジユ、すごく足手まと이었다っただでしょうか？ 普段運動とかしないですし反射神経も悪いですし」

クジユに非があると言外に言うことでナイトラが自責することを回避してみる。この発言は嘘ではない。確かに守るようにとナイトラは頼まれてはいたが自分の身は基本的に自分で守らなければいけない。だからそんな怪我をしたとしても結局は自己防衛出来なかったクジユの責任だ。苦笑混じりに言った言葉の意味が正確に伝わっ

たかは不明だがナイトラは考え込むように目を伏せてしまった。

「クジユは結構重傷みたいで今は眠ってます。お医者さんにも診てもらったので大丈夫だとは思ってますが」

やることもないので受け取った耳栓を潰したり引き伸ばしたりして遊びながら何も知らないであろうナイトラにそう説明する。医者の話では今日中には目覚めないかもしれないそうだが遅くとも明日には目覚めるだろうということだ。医者のお話を信じているので心配はしていない。クジユに関してナイトラに伝えるべきことはこれくらいだろうか。他には何もなかったか考えを巡らせているとナイトラが顔を上げた。まだ体調が万全ではないのか肌は不健康そうな色をしている。

「ありがとうございます」

「……えっと」

いきなりの感謝になんと返せばいいのかわからない。そもそも何に対する感謝なのかがよくわからない。いくつか心当たりはあるのだがどれかがはっきりしないまま返答するのは相手に失礼のように思えた。ウォルの反応で言葉が足りなかったことに気付いたらしいナイトラは淡々と補足する。

「『好き』を消してくださいさってありがとうございます」

「ああ、そのことです。それならクジユに言ってあげてください」

ウォルは結局何もしていない。だがその返しでナイトラはあからさまに嫌な顔をする。何故そうもお互いに嫌い合っているのだろう。同族嫌悪だろうか。特に話題もないのでそのあたりを聞いてみようかと考えているとそれよりも早くナイトラが口を開いた。

「正直不安はあつたんです。貴方達は『好き』が消えると言いましたけどどの程度の範囲が消えてしまうのか不安でした」

ナイトラはもう既に存在しない『好き』を捜すように胸に手を置くと服ごと握りしめた。その動作だけ見れば表情はさぞや苦渋に満ちているのだろうと予想しそうなものだがそれに反してナイトラの表情は変わっていなかった。

「好きだつたつていう事実は俺の中では消えてないんです。ただそれに感情が伴わない。ただの事実としてしか認識出来ない」

責められているのか感謝されているのかははっきりとしない。ナイトラは淡々と言うのでそこから感情を読み取ることが出来ないでいた。これより以前の発言から察するに感謝なのだろうが。

「重いと思ってる部分もあつたんですよ、きっと。もう苦痛も幸福も思い出せないですけど、『好き』をなくしたただでこんなにも心が軽いんです」

それならもつと嬉しそうにしたらどうだろうか。心の中では喜びの舞いをしていたりする可能性もなくはないのでその本音は押しとどめておく。何にせよ依頼主が満足してもらえたのなら良かった。クジユが頑張った甲斐もあるというものだ。依頼したのに後悔する人も中にはいる。心にぼっかり空いた穴に耐えられなくなって返してくれと言う。その場合はウォルが単独であちらの世界に向かなければいけないのでクジユは露骨に嫌がるのだが。今回はそうなってしまわなくて良かった。

「ナイトラさん、一つ聞いてもいいですか？」

「何ですか？」

どうしても聞いてみたいことがある。もしもこの問いに肯定が返ってこなければクジユがなんのために重傷を負ったのかわからなくなってしまう。これまでのやりとりで否定が返ってこないであろうことを予想してこの問いを持ち出そうとしている自分はずるいと思う。それでも自己満足のためにウォルは問いを吐き出した。

「『好き』を消して良かったと思いますか？」

その問いを受けてナイトラは一瞬きよんとしたがすぐに無表情を貼りつけて口を開いた。動く口には躊躇がない。

「勿論」

「そうですね」

その答えしか予想していなかったくせにいざその言葉が飛んできるとどう反応しているのかわからなくなる。どんな感情であれ、本人が望んだことであれ、それをなかつたことにしてしまうのは果たして正しいのだろうか。そんなことを思ってしまう。

「ありがとうございます。クジユにもそう報告しておきますね」

にこやかに笑みを作ってシーナを呼びに行くため立ち上がる。早くクジユが意識を取り戻してくれないだろうか。クジユと話がしたい。シーナを目指して足を速めながらそんなことばかり考えた。

## 理由

目が覚めるとベッドの上だった。

そんな使い古されたような表現しか出てこない程にクジユの頭は覚醒しきつてはいない。とりあえず身を起こそうとしたところ左脇に痛みが走って怪我をしていたことを思い出した。それでも痛みに負けじと上半身を起こす。力の入れ方が悪かったのか起き上がったから左脇の痛みが持続しているのだが無視する。

「クジユ様、おはようございます」

疲労が抜けきっていないのか動かす度に身体は休息を促してくる。今の今まで寝ていただろうに、と自分に自分でツツコミを入れながら最低限の動きで声のした方へと身体を向ける。その先ではシーナが救急箱を広げていた。手には包帯が握られている。

「傷、どうですか？ 包帯巻き直したりはしたんですが傷が結構深いみたいで」

剣で思い切り刺されたわけだから傷が浅くないのは予想がついていたが実際に傷を確認してはいないのでどの程度の傷なのかはよくわからない。試しに左脇に手を触れてみると泣き出したくなるような痛みが駆け巡った。なんとか呻くだけにとどめることに成功する。

「大丈夫ですか？」

心配そうなシーナの言葉には応答しない。その代わりに首を一度縦に振る。血が足りないのか、寝すぎただけなのか意識が霧で覆われたようにはつきりしない。だがそれ以外に体調に異常はないの

で大丈夫だろう。頬にも傷を受けていたことを思い出して手を添えてみれば線上に瘡蓋になつていた。何度か爪を滑らせて瘡蓋を剥がそうとするがどうやらまだ治りきつていないらしくかさぶたを剥がしてしまえば出血してしまえそうだった。瘡蓋は気になるが出血は面倒なので放置することにする。何よりも瘡蓋よりも気になることが一つ。

頬に添えていた手をそのまま上へ持ち上げて目の下を指差す。それが何を意味するのか瞬時に理解したシーナは包帯を手放して両手で目の下を覆い隠した。包帯は床に落ちると弾力があるのか二度ほど小さく跳ねながら転がっていく。先端からだんだんと包帯が勝手に解けていつているのだがそんなことはシーナにはどうでもいいことらしい。包帯には見向きもしない。

「もしかして、泣き跡ついてますか？」

無言で頷く。するとシーナな泣きそうな表情を浮かべてしまった。これは声をかけるべきだろうか。しかし声をかけてしまえばシーナが体調不良を引き起こす可能性が高い。そんな危険を冒してまで声をかけるのはハイリスクノーリターンだ。うまい慰めなどクジユに出来るわけもない。ここは大人しく黙っておくべきだろう。そう結論づけたところでシーナが大粒の涙を零し始めた。体内の水分を全て失って干からびてしまうのではないかと思うほどの大粒の涙を絶え間なく零すシーナはきつとクジユに指摘されてしまったことで我慢が効かなくなったのだろう。こんなことなら気付かないふりをしておけば良かった。面倒だと思ってしまうと同時にシーナがこんな状態になるまで放置しているチェックとナイトラに怒りを覚える。手を差し伸べることも突き放すことも出来ずに結局何もしないとある意味最低な行動をとったクジユだがシーナは気分を害した様子もなく口を開いた。

「煩わしいと、思っていたはずなんです」

ゆったりとしたその喋り方は言葉にすることでその事実を再確認しているようでもあった。涙混じりで喋るのが困難という理由もあるのかもしれない。しゃっくりのような呼吸を何度か繰り返してからシーナは続けた。涙で顔はぐしゃぐしゃになっていて彼女がそれを気にしている様子はない。ただ目から零れる涙が邪魔なように絶えず拭い続けている。涙が止まらない限りその行為は無駄でしかないと思うのだがそれでも拭わずにはいられないのだろうと解釈することにした。

「私は好きなんです。愛してるんです」

誰を、とは言わない。言わなくても伝わると思っているのか。シーナが言わないのなら予測するしかないが恐らくはチエックとナイトラの二人のことを指しているのだろう。どちらも好きで、愛しているのだ。一人は弟として、もう一人は男として。あまり予測するまでもなかったかもしれない。だから？ とくらいしか返答が思いつかなかったのでここでも黙っておく。

「勝手なのはわかってるんです。今まで煩わしくて仕方なかったはずなのにいざ二人がなんでもなくなってしまうたらすごく悲しくて自分でもどうしてなのかよくわからないんです」

シーナの気持ちを少しだけ考えてみる。どう頑張ってもシーナの気持ちを完全に理解することなど出来るはずもないがそれでも想像するくらいは自由だろう。想像力を働かせて考える。それでも想像力に乏しいクジユにはシーナの痛みなど到底理解出来なかった。ただ、一つだけ思ったことがある。

「羨望か」

クジユがそう呟いた途端いきなり恫喝されたかのようにシーナの肩が跳ねる。心の準備が出来ていなかったので驚いてしまったのだろ。その驚きが泣きに拍車をかけてしまったようでシーナの涙はますます止まらなくなってしまった。

「そうかもしれません」

涙で顔をぐしゃぐしゃにしてしゃっくり混じりにそう返したシーナはクジユを見る余裕はなさそう。乱暴な手つきで涙を拭い続けているが目に黴菌が入ってしまったのかと心配になってくる。ベッドから出てシーナの手を掴んでみる。動いたせいで傷が痛み、身体は休ませると言わんばかりに途方もない疲労を訴えてきた。いきなり手を掴まれたシーナは涙を拭う術を失って、その涙は頬から顎を伝い重力に従って落ちていく。シーナはクジユの手を振りほどこうとするわけでもなくただ涙を流し続けた。振りほどく気力もないのかもしれない。嗚咽ばかり漏らすシーナにかける言葉も見つからず黙っていれば彼女は無理矢理に口端を持ち上げて目を細めた。笑おうとしているらしい。

「でも」

二音を発するだけでも震えていることがわかるその声は聞いていて痛々しい。それでも何か言葉を続けようとしているシーナを待つ。慰める方法など思いつかないのだからせめて聞くことぐらいはしようと思う。嗚咽が邪魔してなかなか次の言葉を発することが出来ないシーナを辛抱強く待つ。するとシーナは歯を食いしばって嗚咽を殺すとその一瞬の時間を使って声を絞り出した。

「今更気付いたって、遅いんですけどね」

これは完全に独り言だろう。うまい返答も見つからずに黙っていたら涙は確実に床へ零れ落ちていく。痛む傷を無視してシーナの手を掴み続けていることになんの意味があるのか。そう思い始めたが今彼女の手を放す気にはなれなかった。

「一つ、聞きたい」

このタイミングで全く関係のないことを聞くのもどうかと思うのだが他に話題が見つからない。流石にずっと沈黙を保つわけにもいかないだろう。これでシーナの気が少しでも紛れればそれはそれで構わないし、紛れなければそれまでだ。シーナはいきなりの言葉に戸惑いを見せたがそれでも涙に濡れた声で「どうぞ」を返した。その言葉に甘えて続ける。

「長寿の薬を探している。何か心当たりはないか？」

「……そういえば、そんなことをおっしゃっていましたね」

クジユの問いを受けて目を伏せて考え込んだシーナは服の腕の部分に顔を擦りつけて涙を拭くと鼻を睨った。息苦しいのかわずかに咳き込んでから頭を持ち上げて視線を合わせた。話題があるおかげなのか涙は止まっているような気がした。

「私はよくわからないのですが西に医療技術の発達した国があるという話を聞いたことがあります。そこならもしかすると何かわかるかもしれません」

記憶を辿っているのかシーナの目は泳ぐ。珍しく眉間に皺が寄っているあたりかなり昔の記憶なのかもしれない。それでも何も手が

かりがないよりはいいだろう。西に医療技術の発達した国があるかもしれない。それだけの情報を脳に刻み込んでおく。どうせ当てもないのだから行ってみる価値はあると思う。

「ところでどうして長寿の薬を探されてるんですか？ 余計な質問でしたらすみません」

シーナの問いに答えるべきか迷う。だがすぐに知られて困る内容でもないかと思いつき結局答えることにした。

「救いたい人がいる」

それ以上は説明しようとすれば長くなってしまうだろう。これ以上聞きたいのならばウォルに聞けばいい。興味がないのならばこれで探りを入れるのは終わりにすればいい。そのあたりはシーナに任せるとして、クジュはまた口を閉じる。もう話題が尽きてしまった。せめてウォルがいればなんなりと話を繋いでくれそうなものだがいつも一緒にいるわけでもない。

「大切な人、なんですか？」

不意にそう問いかけられて自分はもしかするととても無神経な質問をしてしまったのではないだろうかということに思い至った。シーナは身近な二人の変化に涙している。二人を失ったわけではないが、普段の光景を失ってしまった彼女に自分達に大切な人間がいると匂わせるような発言は控えるべきだったかもしれない。そう思ったところで発言を撤回出来るはずもなくどう返したのかとしばし考える。うまい言い訳も考えられず、ここは素直に答えるべきだろうという結論に辿り着いただけだった。

「とても」

シーナに極力負担をかけてしまわないようにそれだけ答えると彼女はもう一度泣き出しそうに表情を歪めてから「そうですか」とだけ返した。

## サボリキング

クジユは思っていたよりも元気そうだった。

二人の帰還から一夜明けてクジユが目を覚ましたことをシーナから教えてもらった。その時のシーナは泣き腫らした跡があったのだが触れない方がいいだろうと判断して何も聞かないことにした。もしかしたらクジユが泣かせたのかもしれない。そんな疑惑を抱きながらも対面したクジユは思っていたよりも元気そうでベッドの上で退屈そうにしていた。チェックとナイトラは仕事。シーナはシーナで雑用が色々あるそうですぐにいなくなってしまった。これまでは世話役兼監視として誰かしら近くにいたのだが依頼が無事終了したのもうその必要はないと判断されたのだろう。監視されたいわけではないのでそのことについては触れないことにする。

「元気そうですね」

「そうか？」

思ったことをそのまま口にしただけだったのだがクジユからは疑問形で返ってきた。外見よりは傷が深いのかもれない。試しに左脇を軽く突いてみればクジユはその場につ伏して歯を食いしばった。相当に痛かったらしい。

「えーと、ごめん？」

そこまで痛むとは思っていなかった。あまりに苦痛に表情を歪めるので素直に謝っていいものか躊躇う。とりあえず疑問形で謝ってみればクジユに思い切り睨まれた。睨まれるほどのことをした自覚はあるのでその視線を甘んじて受けておく。

「クジユ、ベッドの上もそろそろ飽きてきたんじゃないですか？  
良かったら散歩でもしませんか？ 俺が支えますし」

「……」

クジユの痛みがだいぶおさまった頃を狙ってそう言ってみる。実際にはウォル自身が暇を持て余していたからこそその提案だったのだがそこは黙っておく。クジユはしばし考え込んでいたが周りに誰もいないことに気付いてからは迷うことなくベッドから滑り出た。傷が痛むのか左脇を庇うように歩き出すクジユを支えることにした。クジユは意地を張る気力もないのか大人しくその支えに頼って来る。

「どこ行きます？ 庭行ってみましょうか？ 迷いそうですけどね」

既に内部は歩き回って見てしまっているので面白くないだろう。ウォルの提案に異議はないのかクジユは何も言わない。それならばとりあえず目指すのは玄関だろう。どっちが玄関だったか若干迷いながらも踏み出す。部屋を出て少し歩いたところでこちらへ向かってくる足音が聞こえて足を止める。このまま歩き続ければ足音の大きさから推測するに曲がり角で激突することになってしまいそうだった。

「王！ どこにいらっしやるのですか！」

「ナイトラさんですね」

どうやらチェックを搜しているらしい。仕事ではなかったのだからか。そんなことを考えている間にナイトラは角を曲がった。そのため二人と目が合う。

「あ……」

ナイトラは二人、特にクジユと目を合わせた途端あきらかに怯えた様子を見せた。もしやクジユが何かしたのではあるまいか。思わずクジユを見ればあからさまに目を逸らされた。何か怖がらせるようなことをしたのだろうか。とは言えナイトラが怯えを見せたのはほんの一瞬ですぐにやるべきことを思い出したのか無表情に塗り替えてから口を開いた。随分と走り回ったのか息はわずかに乱れていた。

「王を見かけていませんか？ 目を離れた隙にいらなくなってしまっ  
て」

弱り果てているのかナイトラの無表情はすぐに崩れ去って眉が八字に垂れ下がる。その表情の変化が落ち込んだ大型犬を連想させて笑い出してしまいそうになった。だが笑っていられるような事態でもなさそうなので笑いは押さえこんだ。

「俺は知らないです。クジユも知らないですよね？」

クジユが首を縦に振ったのを見てナイトラがあきらかに肩を落とす。一体どれほどの間チェックを捜し続けているのだろうか。思わず同情してしまうがだからといって何が出来るわけでもない。

「えーと、良かったら俺達も捜しましょうか？」

「そうしてもらえると助かります」

そう言い切ったナイトラは更に眉を下げてから溜息を吐いた。猫の手も借りたいようだ。

「姉の姿もないですし、もしかすると二人でサボっているのかも  
れません」

「え？ …… ああ」

一瞬その意味を理解しかねたが少し考えて合点がいった。チエツクはクジユに依頼をしたことにより感情の一部を失い結果としてナイトラとの関係は消滅した。そしてこれまでカモフラージュとして利用していたシーナとの交際を本格化したのだ。それについては賛否両論あると思うのだが本人達がそれでいいのなら何も言わないことにしようと思っっている。他人の事情に首を突っ込むとろくなことがない。

「ナイトラさんも大変ですね」

「ええ、依頼を終えてもらってからはめっきりサボられる回数が増えて困り果ててます」

どうやらチエツクはこれまで比較的眞面目に仕事をこなしていたそうなのだがナイトラとの関係が消滅したことで仕事に対する意欲が薄れてしまったようだ。ナイトラがそう愚痴を零してから、それでも以前よりは元気そうなので感情を戻したいとは思っていないと付け加えるので切なくなってくる。ナイトラはもうクジユのことは愛してはいないのだろうが一人の人間として大切に思っているのだろう。

「それじゃあ捜してみますね」

「お願いします」

ウォルに一礼してからナイトラはまた走り去ろうとする。一瞬クジユと視線が交わったが礼をするどころか火花が散りそうな睨み合いを行ってから走り去って行ってしまった。

「何でそんなに険悪なんですか。何かしたんですか？」

「知るか」

今にも唾を吐きそうにそう吐き捨てたクジユはナイトラにウォルが言った通り、チエックを捜すつもりらしい。今までは玄関に向かっていたのだが室内を捜すことにしたのか方向転換をして歩き始める。クジユを支えていたウォルはその突然な動きに振り回されてしまうがそれでもなんとか動きについて行ってクジユを支え続けることが出来た。

「部屋を一つずつ見て行きましょうか」

返事はない。否定もないということは肯定でいいのだろう。せめて頷くくらいはしてくれていいと思うのだがそう抗議したところで無駄だと思うのでやめておく。面倒臭いと一蹴される可能性が高い。

「すぐに見つかるといいですね」

また返事はない。いつものことなので特に気にすることなくまた喋る。

「……あ、いた」

やはりクジユは喋らなかつた。

## 顛末

あっさり見つけることが出来たチエツクはナイトラの読み通りシーナと一緒にいた。適当に入ってみた部屋の中に早速いた二人は多少変わった体勢をしていて、どう声をかけたものかと迷ってしまう。入室にいち早く気付いたシーナが眉を八の字に下げた。どうやら困っているらしい。

「えーと、どういう状況ですか？」

一見すればわかりそうなものだがそれでも疑問が拭えないウオルは思わず聞いてしまう。部屋にいたチエツクとシーナは恐らく逢引中だったのだと思われる。ただその体勢が少しばかり変わっていた。二人は部屋の中央に座り込んでいる。そしてチエツクがシーナの身体を後ろから抱きしめ、その体勢のまま眠っていた。シーナは動くに動けないのか先程から微動だにしない。余程長い時間この体勢でいるらしくシーナはもぞもぞと足を動かしている。足が痺れているのだろう。チエツクを蹴り倒してシーナを解放しようとしたクジユを押しとどめれば、クジユは悔しそうに舌打ちを零す。何故そうも攻撃的なのだろう。機嫌でも悪いのだろうか。

とりあえず見つけたのだからナイトラを呼ぶべきだろう。わざわざ二人で移動する必要もないだろうと判断しクジユを放す。クジユも最初からそのつもりだったのかあっさり放れるとそれでも何か支えがほしいのか壁へ寄りかかった。傷が痛むのか小さく呻く。それから一瞬詰めた息をゆっくりと吐き出す。それから息を吐いたついでとでも言い出しそんな雰囲気でもクジユはある問いを吐き出した。

「幸せか？」

クジユが口を開いた途端どろどろとした何かが空気に混じってこの空間にいる人間を侵す。その不快感には未だに慣れないが慣れているふりをするこくくらいは出来る。ウォルは表情を変えないでいることが出来たがシーナの眉間には皺が寄った。眠っているチェックも不快感を覚えたのか小さく呻く。それに感染したようにクジユも眉間に皺を刻む。不快感を与えてしまった罪悪感というところだろうか。ウォルは部屋を出て行こうとしていたがその問いに対する返答が気になって足を止めた。シーナは急な問いに驚きはあったようだがすぐになにごともなかったかのように笑みを貼りつけた。ただ、その笑みは困り果てたように弱々しいものだった。

「ええ、とても」

そう断言するわりにはシーナの表情には悲しみだとかそんな感情が入り混じっているような気がしてしまう。それでもその答えにクジユは満足したのか鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまった。その愛想のない態度に苦笑しつつ、今度こそナイトラを呼びに行こうと一歩踏み出した。ところがすぐに何かにぶつかって進路を遮られてしまう。

「わっ……ナイトラさん……」

いつの間になっていたのか。目の前に立っていたナイトラは溜息混じりに部屋へと踏み込んでくると二人を視界に入れた。シーナが困っているのがわかったのか、二人の目の前まで歩み寄ると膝を折り曲げるようにして視線を落とす。それからシーナをがっちりホールドしているチェックの両腕を掴むと外側に押し出してシーナを解放した。シーナがチェックから抜け出したがチェックはまだ目を覚まさない。するとナイトラはもう一度溜息を吐いてからチェックの額にデコピンを食らわせた。王にそんなことをしてもいいのだろうか、なんて

部外者のウォルが危惧しているとチェックが額をおさえた。どうやら目を覚ましたらしい。目を擦りながら覚醒したチェックの目の前には当然ながらナイトラがいる。

「おはようございます」

「……おう、おはよう……？」

シーナを抱いて眠っていたはずなのに目の前にナイトラが仏頂面をして存在しているという状況に咄嗟に理解が及んでいないらしい。ナイトラの方はチェックが理解するのを待つ気がないのか口を開いて説教を開始する。

「今日は絶対に完成させていたただなくてはならない書類があると申し上げたはずですよ？ 何故そうやって目を離すとすぐにサボられるのですか。もう少し貴方は王だという自覚を持ってください」

チェックが口を挟む暇もなくナイトラは説教を続ける。説教をしながらもナイトラは立ち上がるとチェックに手を差し伸べた。チェックがその手を取って起き上がるとこれからの予定をつらつらと並べたてる。一体いつ息継ぎをしているのだろうかと疑問に思ってしまうナイトラの饒舌ぶりに驚いているとそれを聞き流していたチェックが「あ」と声を上げた。

「そついえば忘れそうになってたわ」

そう呟いたチェックはくどくどと説教をしているナイトラを無視して歩き出す。懐に手をつ込んで何かを探しているらしいチェックはクジユの前までくると足を止めた。

「お。あつたあつた」

チエックがずりずりと懐から取り出したのは分厚い茶封筒だった。そしてそれで軽くクジユの胸を叩く。クジユが茶封筒を掴むとチエックはそれから手を離す。

「依頼料。そういえばまだ渡してなかったと思って」

中身がちゃんと入っているか確認する為にクジユが開封する。かなりの厚さがあるそれをウォルも覗きこめばきちんと本物がきつしりと詰められていた。こんなにもらつてもいいものなのだろうか、という思いでチエックを見れば焦ったように手を振って見せた。

「あ、これ以上は流石に出せないからな。そりゃ命賭けてこなしてもらった依頼だけだな」

見当違いな発言をするチエックはこの額で不満だと思っていると感じているのだろう。誤解しているチエックにそんなことはないという否定の言葉を向けようとしたところ、クジユに口を塞がれる。余計なことは言つなということらしい。

「充分だ」

「そりゃ良かった。これで不満だって言われたらどうしようかと思つてたところだ」

わかりやすく安堵してみせたチエックは未だに説教を続けるナイトラを一瞥してからまた口を開いた。どうやらナイトラの説教はBGM感覚になつてしまつていようだった。

「まあ、依頼したところで根本的な問題が解決したわけじゃないんだけどな。それでも精神的にはかなり楽になつたぜ」

そういえばチェックは身分の違うシーナと交際しているということになっていたので問題になっていたわけで、ナイトラとチェックの感情を消し去ってリセットしたところで第三者からすれば何も変わらないのだ。しかしそれでもチェックからすれば消した意味が全くないというわけでもないらしい。本人がそれでいいのならいいと思う。

「あ、そういえば」

チェックはまた何かを思い出したらしく声を上げた。今度は何だろうかと思いついた節がないか考えてみるが思いつかなかった。チェックが言葉を吐き出すのを待つことにする。

「俺達結婚することになったから」

まるで日常の延長のようにあっさりとなんか言うものだからそうですか、と適当に返答をしまいそうになる。そのうち言葉の意味が脳にまで浸透してくる。驚きに目を見開けばチェックは頭を掻きながら照れ臭そうに笑った。

「流石に挙式の時までにはないだろうから一応報告だけでもしておこうと思っただけ」

「それはまた……急ですね」

いくらこれまでカモフラージュで付き合っていたとはいえ結婚とは急すぎではないだろうか。つい先日までナイトラとそういう関係だったのならシーナもさぞかし複雑なことだろう。そう思いシーナを見るが彼女はどこか嬉しそうに表情を緩めただけだった。……本人がいいのなら構わないのだが。

「おめでと〜ございます」

「おう、ありがとう」

チエックが嬉しそうにそう返したところで説教を聞き流し続けられているナイトラがチエックの首根っこを掴んだ。突然のことで驚きの声を上げたチエックに構うことなくナイトラは立腹している。

「王！ 仕事は溜まっているのですよ？ こんなところで油を売っている暇はありません」

そう至近距離でそう説教をするナイトラは最初と比べて印象が変わったような気がする。これまではチエックに対して王相手とは思えない扱いが目立ったが今では小言は多いものの一応王として敬っているような気がしなくもない。感情を塗り潰した影響だろうか。良いことなのか悪いことなのかを判断することはウォルには出来ないが良いことなのかだと思いたい。

「わかったよ。もうお前は口うるさいな」

「王がきちんとしてくださらないからです。きちんとしてくださればこんなに文句を口にするともありません」

「あー、もう！ わかった、わかった！ 仕事するって！」

ナイトラの説教にうんざりしているのか両手で耳を塞ぐとチエックは歩き出す。シーナの横を通り過ぎる時に彼女の頭に手を置いてから「また後でな」と声をかけたのが聞こえた。その後ナイトラが続く。

しばらく二人の話し声聞こえていたが距離が出来たせいでだんだんと聞こえなくなってくる。それを何気なく三人で聞いていたが突然我に返ったシーナが弾かれたように動き始めた。

「あ！ し、仕事はまだ残ってるんですけど！ すみません！ 失礼します！」

大きく二人へ一礼したシーナは頭を上げながら走り去って行く。その一連の動きを見送ってから慌ただしさに苦笑する。チエックに拘束されていて仕事が出来なかったのだらうか。ウォルと同じようにシーナを見ていたクジユは欠伸を一つ零した。

「支度しろ」

「……もう出て行くんですか？ まだ怪我也治ってないのに？」  
「うるさい」

ウォルの心配の言葉を鬱陶しそうに受け流したクジユは歩き始める。ウォルの支えなど必要などでも言わんばかりに無理をして自力で歩いてきた。これはもう何を言っても聞きはしないだろう。諦めて支度をするにしよう。支度をするために移動するクジユの足取りは危なげだ。その背中に不意に問いを投げかけたくなった。

「クジユ、これで良かったんですか？」

クジユの返答はない。返答がなかったのもう一度問いを重ねた。「あれで本当に幸せって言えるんですかね？」

そう問いかけたところでクジユが足を止めて振り返った。倦怠感の見え隠れするその緩慢な動作はやはりここを出るのはもう少し待った方がいいのではないかと提案したくなるほどに不安を煽った。だがここで何を言っても聞かない上に気まずい空気になってこれからの旅に支障をきたしても困るので黙っておく。クジユはひどく面倒そうにウォルを見てから言った。

「さあな、本人次第だろう」

本当に関心がないのかそう言い切ってからクジユはまた歩き出す。クジユの声に侵された神経を浄化するために適当に返事をすれば眠いのかクジユがまた欠伸を零した。

## Side 宿屋の娘B

私には好きな人がいる。

私は宿屋の娘で、ある日泊まりに来た男の人に一目惚れをした。彼は一言で言うなら真っ黒。髪や瞳、果ては衣服までが真っ黒だった。彼は二人組の宿泊で、もう一人は彼とは対照的に真っ白でお互いを強調させていた。にこやかにほほ笑む白い方の人は紳士的で誰かと話す時は決まってその人が話していた。彼はその人に交流の一切を任せているのか一言も喋ろうとはしない。話しかけられてもすぐに視線で白い人を捜して任せてしまう。白い人もそれが当たり前のようにしているものだから私はまだ一度も彼の声を聞いていない。でもそんなクールなところも素敵だと思う。それに、

「すみません、今日の晩ご飯は部屋に持って来てもらっていいですか？」

「あ、はい！ わかりました」

白い人にいきなり声をかけられて驚く。他の人は澄んだ声をしていて好印象だというけれど私はそうは思わない。この人の声は澄みすぎていて怖いと思う。白い人の声は全部を浄化してしまいそうなほどに澄んでいた。澄んでいればいいというものではない。綺麗すぎるものは逆に不気味さを醸し出してしまふというものだ。

朗らかに笑う白い人には申し訳ないが苦手意識を感じてしまうのは仕方がない。今日の晩ご飯は部屋まで持って行かなければいけないということを通して頭に叩き込んでから逃げるように白い人から離れることにした。白い人は怖いけれど彼に会えるのは魅力的だ。今晚は私が晩ご飯を運ぶことにしよう。そんな密かなる決意を持ってみたりする。家業の手伝いとしてモップを片手に掃除をしながらそんなことを考えていると不意にその手が止まった。

「あ」

噂をすればなんとやらというやつだ。前方には彼がいた。そういえば今日はまだ見ていなかったから今の今まで寝ていたのかもしれない。黒髪の右側は寝癖なのか跳ねていて、目は半目でまだ眠そうだ。やはり寝ていたのだろう。そんなだらしないところも素敵だと思つた。

「おはようございます」

目が合ったからには宿屋の娘として無視をするわけにもいかないだろう。緊張しすぎておかしな顔になってしまつていないか心配しながらも笑いかけてみる。彼は私に気付いてくれたみたいだけどそれでも軽く会釈を返すだけで一言も口を開こうとはしなかった。無理に声を聞きたいわけではなかったけどせっかく好きな人と偶然会つたのだから少しでも長く一緒にいたいと思つてしまふのは仕方ないだろう。きつとあと数日もしないうちに旅立ってしまったのであるからこれくらい欲張つてはいいのではないかと思つた。

「今起きられたんですか？ 今日みたいに天気がいいといつまでも眠つていたくなりますよね」

歩み寄りながら話しかけると彼は明らかに困つた表情を作つた。それから視線が泳ぐ。白い人を捜しているのだろう。それはわかつたが返答がほしいわけではないのだ。一方的でもいいから話したい。だから困っている彼には見なかつたふりをして話し続ける。

「私も本当は寝ていたいくらいなんですけど両親が仕事手伝えーつてうるさくて。あ、今のは馬鹿にしたとかじゃないですよ？」

返事をしなくてもいいように一方的に捲し立てて返答が必要な言葉は投げかけない。注意深く言葉を選びながら話しかけ続けていると彼が溜息を吐いた。一方的に話するさい女だと思われてしまったのだろうか。そう思うと悲しいが彼がはつきりそうだと態度に現わしていない以上あまり勝手に思いこんでしまうのは危険だと思えた。だからそれでも話し続けていると不意に彼が口端を綻ばせた。今まで無表情を貫いていただけにそんな些細な表情の変化にもどきりとしてしまう。そんなにおかしなことを言っただろうかと自分の発言を振り返っていれば彼の口がゆったりと開いた。まさか。

「楽しそうで何よりだ」

「っ!？」

彼は笑っていた。初めて喋ってくれた。それなのに私の身体に走ったのは歓喜ではなく恐怖だった。凄まじい量の恐怖が一気に雪崩れ込んでくるような感覚に思わず手にしていたモップを手放してしまう。見開いた瞳は瞬きを忘れ、徐々に乾き始めていた。しかしそんなことを気にしている余裕はない。身体がじつとりと汗をかき始め、今すぐにも逃げ出したい衝動に駆られた。それでも恐怖に萎えた足ではこの場に立ち続けているのが精一杯で動こうものならその場にへたり込んでしまいうさだだった。好きな人の声を聞いただけなのにこれまで怯えている自分が不思議で仕方なかったがそんな疑問すら恐怖が凌駕していた。

「あ、あ……」

何か言わなければ。いきなりこんなに怯えられて彼だって不思議がっているはずだ。でも口からは意味を成さない言葉しか出て来ない。絶対に変な女だと思われる。彼はどんな顔をしているのだ

ろろ。軽蔑するような目で見られていたらどうしよう。そんなことを考えながら恐る恐る彼の顔を覗き見る。すると彼は軽蔑の表情などは浮かべていなかった。

「……………なん、で？」

恐怖で凍りついて声ではそれだけ絞り出すのがやっとだった。そして彼は軽蔑などしていなかった。その代わり今にも泣き出しそうな表情で端正な顔つきを台無しにしていた。ああ、でもこれはこれでかっこいいのかもしれない。彼はその表情を崩さないまま私の横を通りすぎて行く。部屋に戻ってしまふのだろうか。呼び止めたかった。でも本能に恐怖がこびりついていてそれを阻止する。

「どっして……………」

彼の姿が見えなくなったところでなんとかそれだけを言葉にすることが出来た。どうして彼の声を聞いた途端これほどまで恐怖を覚えてしまったのだろうか。そして何よりも彼の姿が見えなくなった瞬間心底安堵した自分への嫌悪でおかしくなってしまうそうだった。

そう嫌悪しつつもここから動こうとしない自分がどうしようもなく醜いものと思えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8121w/>

---

ナイトキングの国

2011年11月17日13時03分発行